



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	山形県酒田市における総合型地域スポーツクラブの設立と課題
Author(s)	笹瀬, 雅史; SASASE, Masasi; 鈴木, 智子 他
Citation	北海道大学大学院教育学研究科紀要, 101, 149-199
Issue Date	2007-03-30
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.101.149
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/20490
Type	departmental bulletin paper
File Information	101_-149-199.pdf



山形県酒田市における 総合型地域スポーツクラブの設立と課題

笹瀬 雅史*・鈴木 智子**

On the Process of Organization and some Problems of the Comprehensive Community Sport Clubs in Sakata City

SASASE Masasi and SUZUKI Tomoko

I. 序論

1. 課題

(1) はじめに

近年、わが国では少子高齢化の進行が著しい。高齢者の増加にともなって健康の保持増進や余暇時間の活用への関心が高まっている。そのなかで身体運動やスポーツの重要性が論じられている。また、科学技術の進歩で生活は便利になり、仕事の変化や交通手段の利便化によって運動不足になってきている。他方で、労働時間短縮や休暇の増加などから、余暇時間は増加してきている。こうした社会状況の変化のもとで、身体運動やスポーツの必要性が社会的に認識されるとともに、健康増進意識の高まりや運動不足の解消、余暇時間の活用のために、スポーツを行う人が増えてきている。

こうした社会状況に対して、2000年9月に文部科学省は「スポーツ振興基本計画」を策定した。スポーツ振興基本計画は21世紀初頭のわが国のスポーツ行政の基本的な指針となる長期計画である。そこでは、「生涯スポーツ社会の実現」がうたわれているが、そのための具体的な一施策が「総合型地域スポーツクラブ」の育成である。

総合型地域スポーツクラブは、少子化にともなって縮小するスポーツ少年団、学校運動部活動の受皿として、また、高齢者をはじめとする成人のスポーツ活動の新たな場として注目されるとともに、クラブが地域社会と住民に果たすべき役割が期待されている。

スポーツ振興基本計画において、2010年までに全国の各市区町村に少なくとも1つは総合型地域スポーツクラブを育成するとした。そして、現在に至るまで全国の各自治体で総合型地域スポーツクラブの育成に取り組んでいる。しかし、総合型地域スポーツクラブは馴染みのないものであり、順調に進展しているとはいえない。市区町村では戸惑いを抱え模索をしながら取り組んでいるのが実情である。

(2) 先行研究

総合型地域スポーツクラブの展開にともなって、その報告や研究も行われてきている。第1

* 山形大学地域教育文化学部文化創造学科助教授

**山形銀行

はクラブの創設・育成・運営のテキスト的なものである（資料24, 33）。第2は研究者・クラブ当事者らによる実践を踏まえたクラブ論である（資料34, 35, 36）。

歴史が浅いこともあってクラブを対象とした実証的研究は、本格的に開始されたばかりである。研究の対象も「モデル事業」の先行クラブの紹介や報告が多いのが特徴である。1995年に開始された文部省のモデル事業のクラブの研究から学ぶ点は数多くあるが、こうしたクラブは行政の支援と多額の補助金を得ているケースが多い。それらを期待できない全国のほとんどの市区町村では、自らクラブ育成の問題を解決するほかはないのである。したがって、市区町村ではどのようにクラブ育成が進められているのか、実態にもとづいて調べる必要がある。

（3）酒田市に注目する理由

本研究では、山形県酒田市の総合型地域スポーツクラブに注目し、対象にとりあげる。

酒田市では、2003年に市で独自にスポーツ振興計画を策定し、クラブづくりに着手した。国のモデル事業の指定は受けなかったものの、比較的早い時期に10万都市に一気に5つのクラブができたことは注目に値する。多くの自治体では、1つのクラブを育成することすら困難であり、複数のクラブを育成するのは容易なことではないからである。酒田市のケースは全国的にみても大変興味深く、注目して研究する意義がある。なお、酒田市について取り上げた先行研究はみあたらない。

さらに酒田市のケースを研究することは次のような意義をもつ。

酒田市の5クラブは、1つは市全域を対象基盤とし、4つは中学校区を基盤としている。中学校区でのクラブ設立はスポーツ振興基本計画で述べられたことである。その点から、酒田市の4ケースを見ることで、その特徴や長所・短所がわかる。そしてクラブの対象エリアの範囲設定（ゾーニング）の問題を検討するうえでの知見が得られると考える。また、クラブと地域組織や既存の各種団体との関係についても知見が得られる。このように、酒田市のケースを検討することで、全国の他市区町村にとっても、今後1市町村1クラブを超えて、複数クラブを設立していくうえで参考になることが多いと考えられる。

そこで本研究では、まず、酒田市で総合型地域スポーツクラブがなぜ、どのようにしてできたのかを行政や地域組織との関係に注目しながらあきらかにする。次に、酒田市における5つの総合型地域スポーツクラブを対象に、設立基盤と設立の経緯、活動内容、会員、組織運営体制などクラブの構造についてあきらかにするとともに、クラブが地域に果たす役割と今後の課題について問題提起することを目的とする。

研究にあたっては次のような点に注目する。

- ①国や県が示す総合型地域スポーツクラブの理想像と比較してどうか？そして各クラブの設立経緯と現状はどうなっているか？
- ②クラブ設立の地域的要因と学校、地域組織との関係に注目する必要があるのではないか？
- ③クラブ設立と活動はどのような地域的機能を持ち、地域課題の解決に貢献しているか？
- ④酒田市のスポーツ行政・「酒田市スポーツ振興計画」との関係と今後の課題は？
- ⑤中学校区を単位とするクラブ設立の適否と今後の可能性はどうか？

2. 方法

まず、全国ならびに山形県のスポーツ行政と総合型地域スポーツクラブの状況を把握するために、山形県広域スポーツセンターにて基礎資料の収集を行った。

酒田市では、酒田市教育委員会体育課、生涯学習課において基礎資料の収集と、聞き取り調査を行った。そして、酒田市の総合型地域スポーツクラブ5団体を対象に、調査票に基づいてクラブマネージャーや代表の方に聞き取り調査を行った。調査項目は、設立の経緯、組織運営体制、活動内容、会員、施設、財政、現状の評価と課題等、全20項目にわたる。その後、実際のクラブ活動の見学やクラブ会員への聞き取り調査を行った。

調査期間は2004年9月～2005年12月である。

なお、酒田市は2005年11月に市町村合併を行った。本研究では合併以前の酒田市を対象としたものである。

本稿は、総合型地域スポーツクラブについて、全国的な状況、山形県の状況、酒田市と教育行政、酒田市の5つのクラブの調査結果、考察の順序で記述をすすめる。

II. 国・県のスポーツ振興策と総合型地域スポーツクラブ

1. 「スポーツ振興基本計画」（2000年）と総合型地域スポーツクラブ

「スポーツ振興基本計画」は21世紀初頭の新たな社会状況、スポーツをめぐる状況をふまえ、スポーツ振興施策を長期的・総合的に推進するため、「スポーツ振興法」第4条（1961年）に基づき、文部大臣の諮問機関である保健体育審議会の答申「スポーツ振興基本計画の在り方について」（2000年8月）を受け、2000年9月に告示したものである。

スポーツ振興基本計画には、2001年度から概ね10年間で達成すべき政策目標と具体的施策がもりこまれている。

- | | |
|--------------------------------|---------|
| (1) 地域におけるスポーツ環境の整備充実方策 | …生涯スポーツ |
| (2) 我が国の国際競技力の総合的な向上方策 | …競技スポーツ |
| (3) 生涯スポーツ・競技スポーツと学校体育との連携推進方策 | …学校体育 |

そして、これは中間にあたる5年後に計画全体の見直しをはかることにしている。

また、「スポーツ振興基本計画」中の「(1) 地域におけるスポーツ環境の整備充実方策」の政策目標として「生涯スポーツ社会の実現のため、できる限り早期に、成人の週1回以上のスポーツ実施率が50%となることを目指す。」ことを掲げた。その目標を達成するための具体的な施策として、次の2点が打ち出された。

- ① 2001年度～2010年度の10年間で、全国の各市町村において少なくとも1つは総合型地域スポーツクラブを育成すること（将来的には中学校の地域）
- ② 2001年度～2010年度の10年間で、各都道府県において少なくとも1つは広域スポーツセンターを育成すること（将来的には広域市町村単位に）

ここに「総合型地域スポーツクラブ」の育成が重要な具体的施策として打ち出されたわけである。総合型地域スポーツクラブは、スポーツ基盤としての地域の重要性が増大しているスポーツ界の事情と、高齢化社会の到来の中で継続的なスポーツ実施者の増加による健康づくり、生きがいづくり、地域づくりが必要になったことなどを受けて、生涯スポーツの中核としてもとより、競技スポーツや学校スポーツの基盤としての期待も担っている。（資料25. 4頁）

「総合型」とは、3つの多様性（種目、世代・年齢、技術レベル）を包含している。その特徴をあげると

- ① 単一種目だけでなく、複数の種目が用意されている。

- ②地域住民の誰もが、年齢、興味・関心、技術・技能レベルなどに応じて、いつまでも活動できる。
- ③活動拠点となるスポーツ施設をもち、定期的・継続的なスポーツ活動を行うことができる。
- ④質の高い指導者がいて個々のスポーツニーズに応じたスポーツ指導が行われる。
- ⑤地域住民が主体的・自主的に運営する。

この他に、文化的活動も行うこと、地域社会との関わり・交流を持つこと、自主財源、理念の共有などの特徴を有する。

そして国では次のような施策に取り組んだ。

すでに、文部科学省では1995年度から「総合型地域スポーツクラブの育成モデル事業」の全国展開を推進した。1995年度は、岩手県金ヶ崎町、山形県鶴岡市、愛知県半田市、広島県熊野町、福岡県北九州市、宮崎県田野町の6クラブが対象となり、3年間の補助金を得て活動を開始した。その後、2000年度～2002年度までで合わせて、全国で64ヶ所でモデル事業が展開されている。

2002年からは、スポーツ振興くじ（toto）による補助制度が実施された。

その後、totoによる補助制度は、その売れ行き不振で困難なこともあり、2004年度からは財団法人日本体育協会指定のクラブ創設補助事業を開始している。

文部科学省の調査によれば、2004年7月現在で、全国で創設済みクラブが635クラブ、394市区町村である。また、創設準備中が482クラブ、380市区町村である。全体では、1,117クラブ、702市区町村である。創設済みと準備中を合わせても、全国の市区町村数3,122からみると、20%を超えたところという状況である。（資料26）

ただし、これには兵庫県の独自の施策である「スポーツクラブ21ひょうご」の取り組みによって小学校区単位に設立された700を超えるクラブは別枠で算入されていない。

2. 「山形県スポーツ振興計画」（2002年）と総合型地域スポーツクラブ

本研究の対象である酒田市は東北地方南部の山形県にある。ここでは山形県のスポーツ行政とクラブ育成の動向について述べる。山形県は人口約125万人、市町村数は2004年時点で44である。

国の動向を受けて山形県も動きだした。1992年に開催した「べにばな国体」以後10年がたち、少子高齢社会の到来、スポーツニーズの変化、完全学校週五日制等の状況の変化があった。そこで2001年3月、山形県スポーツ振興審議会に諮問を行い、2002年1月に審議会は答申した。

これを受けて山形県は、2002年3月に「山形県スポーツ振興計画～豊かなスポーツ文化の創造～[スポーツのある生活の実現]を目指して」を策定した。（資料28）「山形県スポーツ振興計画」では基本目標として「豊かなスポーツ文化の創造—[スポーツのある生活の実現]を目指して」を掲げた。これはスポーツが生活の一部になるほど身近なものにしていこうという趣旨を文化と表現し、山形県の豊かな社会の実現に大きな役割を果たしていくことを目指したものである。「山形県教育振興計画」と連動し、計画期間は2002年度～2011年度の10年間である。計画の内容として、次の4つの目標を示している。

1. 誰にでも親しめるスポーツの推進—成人の週1回以上のスポーツ実施率50%。

2. 感動と活力を生み出す力強いスポーツの推進—オリンピック級の選手や国民体育大会等で活躍できる選手の育成。
3. 学校における体育・スポーツの充実—豊かなスポーツライフの基礎づくりと体力の向上。
4. スポーツ振興を取り巻く諸条件の整備。

1についての施策展開の方向と主な施策の中で、広域スポーツセンター整備、総合型地域スポーツクラブの育成を、スポーツ指導者の充実、スポーツ施設の整備と有効活用、スポーツ情報の提供などとともに述べている。

2002年7月、県は「山形県広域スポーツセンター」を設置した。天童市の県体育施設内に「中央広域スポーツセンター」を置き、あわせて県内の4地区（庄内・最上・村山・置賜）の教育事務所所在地に「地区広域スポーツセンター」を4ヶ所設置した。一気に5つの広域スポーツセンターが設置されたことは注目される。この事業には国から2002年～2003年度補助金を受けた。

広域スポーツセンターでは、県内各市町村の巡回やセミナー開催などによるクラブの説明会・研修会、クラブマネージャーの養成、有資格者の派遣、スポーツ情報の収集と提供、クラブの創設・育成、活動全般への支援などの事業に取り組んでいる。（資料6，8）

次に、山形県での総合型地域スポーツクラブの状況について述べる。

山形県で国・文部科学省のモデル事業となったのは、鶴岡市（1995～97年度）と金山町（2000～02年度）の2ヶ所2クラブであった。

2005年7月の時点で、設立クラブ数が14、設立準備クラブ数が20で合計34ある。山形県内の44市町村中で、設立市町村数は10、創設準備市町村数は11である。設立市町村の割合は20%を超える程度である。現在創設準備中のクラブは日本体育協会指定の補助事業対象のクラブが多い。（資料7）

山形県では2004年12月に「山形県がめざす総合型地域スポーツクラブ」を策定した。このなかで、総合型地域スポーツクラブが、スポーツ界の事情や高齢化社会の中で果たす役割が大きいことを重要視し、これまでの大会・イベントによるスポーツ振興から、多様な人々のニーズに応えられる環境づくりへ転換するとして、「sports for every one」が実現できる総合型地域スポーツクラブの県内全市町村の全中学校区への創設をめざしていくとしている。（資料25）

Ⅲ. 酒田市の社会体育・生涯スポーツ

1. 酒田市の概要

酒田市は、東北地方南部の山形県西北部、日本海に面し最上川の河口に位置している。酒田は季節の彩りに溢れた海、山、川、平野の織り成す美しい自然の豊かな恵みや、港町としての歴史、伝統文化に培われた自由闊達で進取の気風に富む街である。

背後には広く広大な庄内平野が広がり、冬の季節風は強いものの、対馬暖流の影響を受けた温暖湿潤な気候が、わが国有数の穀倉地帯を形成している。北西約39キロメートルの日本海上には、山形県唯一の離島である飛島があり、秋田県との県境にそびえる鳥海山とともに、鳥海国定公園に指定されている。豊かな自然と長い歴史に刻まれた文化を大切にしつつ、重要港湾酒田港を中心とした交流都市として、順調な発展を続けている県内第二の都市である。（資料4）

酒田は戦国時代は越後の上杉領、山形の最上領であったが1622年酒井家が庄内藩主として入部して以来、酒田港は明治まで酒井領となり亀ヶ崎を出城におきその治下に属した。

河村端賢が江戸幕府の命を受け、港口に米置場を設け、西回り航路を開発して大阪、江戸に運んだ。そして36人衆が町づくりをはじめた。後に本間家が台頭し現今10代を数える。最高2,000町歩、3,000人の小作人を抱え日本一の大地主として終戦を迎えた。小作争議を起こしていないことは注目に値する。

1894年には大地震があり、水深が浅い港は蒸気船の時代に機能しなくなった。1931年に酒田市は市制を施行した。山形県は1970年に北港開発に着手し1984年に5万トンの船が入港した。1976年に市中心部22.5haが焼失する酒田大火に見舞われた。(資料4.4-5頁)

酒田市の人口は、1975年に97,723人で、その後約30年間10万人前後で推移しており、2005年度現在98,000人である。(資料27)また、酒田市の人口は1990年から2000年の10年間で約3千名の微増で推移している。その期間に高齢者数は7千人増加しており高齢化の進行が著しい。人口に占める高齢者の割合(高齢化率)は、1975年には8.9%であったが、2000年に22.1%、2002年には23.6%と高くなっている。他方で15歳までの年少人口については、1990年が18,696人(18.5%)から2000年の15,150人(15.0%)へと減少している。(表1参照)

酒田市の地域別人口については、2004年3月で、市街地域約74,485名、農村地域25,062名である。すなわち酒田市では、市街地域に人口の75%、農村地域に人口の25%の人が住んでいる。一世帯あたりの人数は、市街地域が2.6名、農村地域が3.7名となっている。(資料31)農村地域を構成する12の各地区の人口は1,400~3,000名である。市外地域の地区は4,400~8,100名である。これらの地区は小学校区と重なっている。なお、農村地域については地区単位の人口が明確であるが、市街地域の地区ごとの人口は推計である。

農村地域の多くは、1954年の市町村合併で編入された。いわゆる昭和の大合併である。それ以前の旧酒田市は現在の市外地域に重なっている。新たに編入した農村地域では旧の各地区が現在でも地域的単位として機能している。

表1 酒田市の人口構成と推移

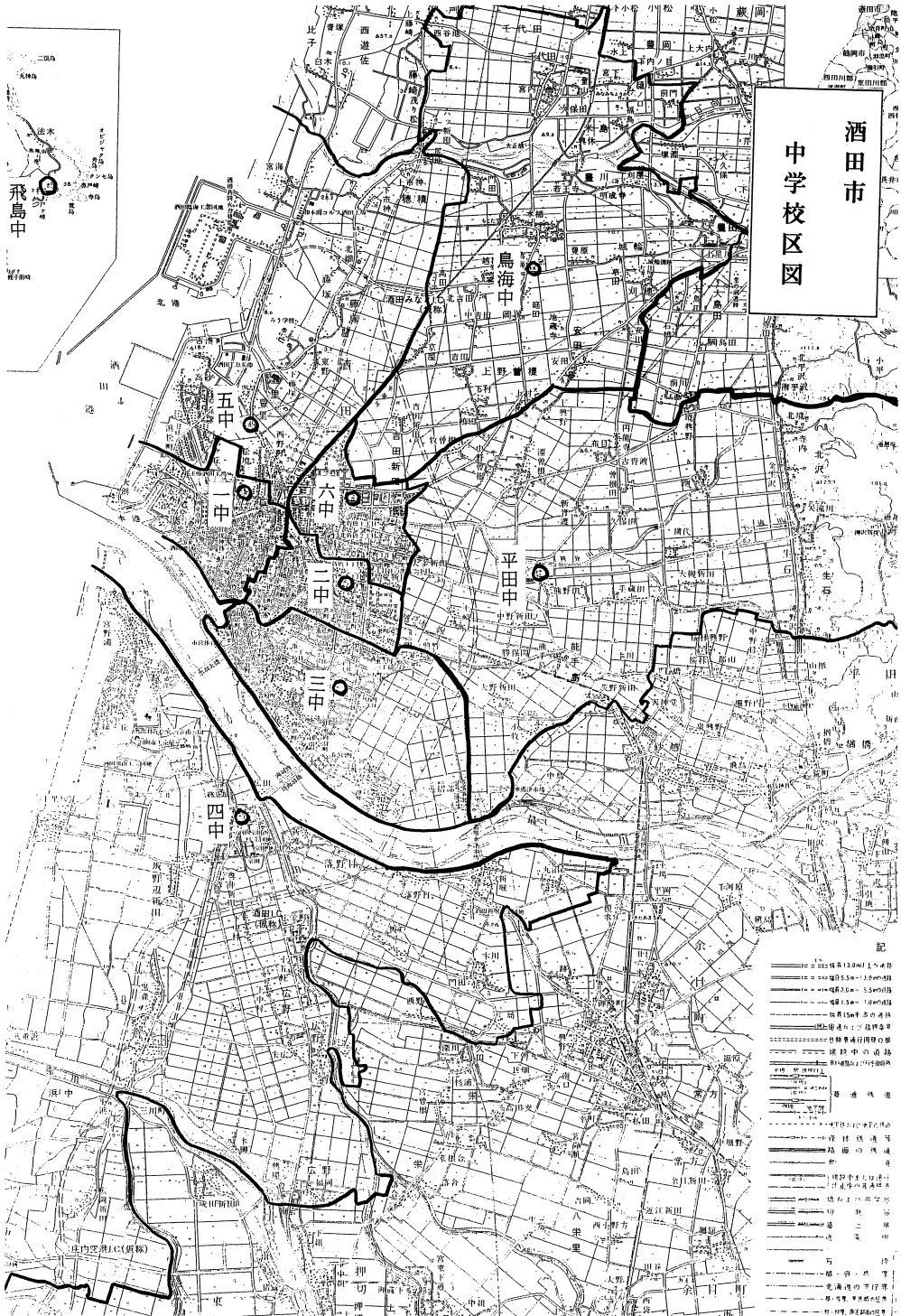
	人口(人)	~15歳(%)	15~65歳(%)	65歳~(%)
1990年	100,811	18,696(18.5)	66,824(66.3)	15,291(15.2)
1995年	101,230	16,638(16.4)	65,537(64.8)	19,055(18.8)
2000年	101,311	15,150(15.0)	63,768(62.9)	22,393(22.1)

(出所：酒田市資料)

2. 酒田市の教育

酒田市には22校の小学校、8校の中学校をはじめとして、県立・市立・私立の高等学校が8校、大学までの学校教育機関がある。〔酒田市中学校区図〕参照)

酒田市教育委員会の機構は事務局と教育機関に2分される。事務局には管理課、学校教育課、



(出所：酒田市教育委員会)

生涯学習課，文化課，体育課の5課がある。体育課には体育係があり，スポーツの振興，施設管理にあたっている。体育課には7名の事務吏員が配置されている。(資料4)

酒田市では，教育はひとりひとりが個性・人格を磨きつつ，他人への思いやりの気持ちを持ち，それぞれの個性を尊重しながら行動し，たくましく，創造力に富み，地域社会や国際社会に貢献する人間を育みたいと願うものとして重要視している。このような考えのもとに，「酒田市総合計画」における将来の発展像「世界に開かれた活力と夢のある個性豊かな交流都市酒田」及び基本目標の一つである「伝統と個性にあふれ，未来を創造する教育文化都市」をふまえて，次の三つを教育目標に設定している。(資料4. 1頁)

- (1) たくましく，創造力に富む人間の育成。
- (2) 個性を尊重し公共心の高い人間の育成。
- (3) 郷土を愛し，豊かな国際性を持つ人間の育成。

学校教育基本方針には社会の変化に対応できるように，一人一人の子どものよさや可能性を伸ばし，確かな学力や豊かな感性，社会性をはぐくみ，自ら考え，自ら行動する子どもを育成していくことを掲げている。

酒田市では，1999年から2005年の6年間で，小学校児童は6,249名→5,761名，中学校生徒は3,437名→2,913名へと，ともに約500名減少している。小学校児童数で約8%，中学校生徒数は約15%の減少である。学校規模は，小学校21校では最小70名，最大631名で平均は274名である。中学校8校では最小164名，最大676名で平均は364名である。近年においても少子化により，小中学校の児童生徒数は減少してきている。

社会教育・生涯学習については，市街地域を中心に市全体をカバーする中央公民館1と農村地域に12の地区公民館がある。また，1980年代以降，市内各地区にコミュニティセンターが順次設置されてきている。公民館とコミュニティセンターの担当部署はともに教育委員会生涯学習課である。

公民館とコミュニティセンターは，社会体育・生涯スポーツと関わりをもつので説明をしておく。

1949年に旧酒田市に公民館が設置された。1954年に始まる合併により近隣の9ヶ村が編入され，地区公民館が10館設置された。1978年に公民館全館主事複数制が実施された。1985年に地区公民館は常勤館長1名，主事1名の2人体制が実施された。

公民館は社会教育法に基づいて運営されている。予算も配分されている。中央公民館は市全域を対象とした事業や，他の館と共同の事業を行っている。

公民館の学習プログラムには，健康講座や体操・運動などが入っているケースが多い。ある地区公民館ではダンス，ヨガ教室，パワーリハビリなどを実施した。また，地区の運動会も体育振興会との共催で行っている。

旧酒田市に該当する市街地域には，学区レベルでは公民館や地域推進機関がなかったこともあり，コミュニティセンターが設置された。

コミュニティセンターの運営にあたるのがコミュニティ振興会である。コミュニティ振興会は，自治会の集合体であり，防犯，衛生，福祉，学習など間口の広い活動を行っている。文化・生涯学習事業もあり，各種の教室が開かれている。教室の中には，運動やスポーツ，健康に関するものもある。これらは地区の体育指導委員や指導者と相談して行われている。財源は地域住民の自治会費と助成金である。

コミュニティ振興会は市外地域に10団体あり，市全体で23団体ある。

1989年には農村地域の12地区公民館すべてにコミュニティセンターが併設されている。地区公民館には公民館とコミュニティセンターの2枚の看板がかかっている。市所有の公民館をコミュニティセンターが借りる形をとっているわけである。

また、12ある地区公民館のうち、10の公民館では公民館長とコミュニティ振興会長は兼任している。この事情は次のようである。まず地区ごとに選ばれた自治会長の会長会議でコミュニティ振興会長が選ばれる。そして、振興会長も構成員である公民館運営審議会において、多くの場合に慣行としてコミュニティ振興会長を公民館長として選出し、市が委嘱するのである。施設には、研修室、講堂（体育館）、調理室などが備えてある。

3. 酒田市のスポーツ振興

(1) 酒田市スポーツ振興計画

酒田市では、1995年3月にスポーツ振興の指針となる「酒田市スポーツ振興基本方針及び施策」を策定していた。しかし、既に6年が経過し、この間にスポーツ環境は大きく変化している。生活の利便性向上や労働時間の短縮などにより自由時間が増大した。また、高齢化社会の進展により軽スポーツ、ニュースポーツが数多く生まれ、2002年度から完全学校週5日制が実施されることなどである。

そこで、2001年10月26日に酒田市スポーツ振興審議会に諮問し、以後6回の審議を経て2002年3月に答申がなされた。これを踏まえて一層のスポーツ振興を図るため中期計画となる「酒田市スポーツ振興計画：スポーツで健康、活力、夢21—ひとり1スポーツをめざして」が2003年3月に策定された。

この計画は「酒田市総合計画（第5次酒田市振興計画）」中の「健やかな日々と生涯スポーツの推進」の実現に向けて、総合的な視点からスポーツ振興に関わる基本的な指針を定め「健康さかた21計画」などとの整合性を図りつつ施策の展開につとめとなっていた。（資料32）計画期間は2002年から2005年である。

酒田市スポーツ振興計画の基本目標（第2章）の「1. 計画の目標指針」は「だれでも、いつでも、どこでも」、スポーツに親しめる環境づくりである。そして（1）計画のテーマとして次の3点があげられている。

- ①「ひとり‘1’スポーツ」の推進。
- ②生涯スポーツの推進と競技スポーツの振興。
- ③本市の特徴を活かした川や海を利用したスポーツ等の普及拡大。

生涯スポーツの推進については「ひとり‘1’スポーツ」を推進するまちづくりを行っていくことが重要である。（資料2. 2-3頁）

また本計画では「総合型地域スポーツクラブ」の設立を生涯スポーツ推進の重要施策として位置づけている。そのためにはスポーツをしていない人々への働きかけや参加を促す事業、子どもや高齢者、障害者にも参加できる施策を推進する必要がある、施設、人材確保も重要である。以上のことを包含した総合型地域スポーツクラブの設立を生涯スポーツ推進の重要施策として位置づけている。（資料2. 4頁）

(2) 教育委員会体育課

先に述べたように、酒田市教育委員会体育課には体育係があり、スポーツの振興、施設管理にあたっている。体育課には7名の事務吏員が配置されている。

また20をこえる体育施設がある。施設管理は酒田市施設管理公社に委託して行っている。(資料5)

体育指導委員は各地区選出の1名と学識経験者等から30名以内で構成されている。

さらに各地区では3名の体育指導員を選出している。体育指導員は、地区の体育振興会から推薦された人を市が委嘱する。以前は地区あたり5名であったが、現在は3名となっている。市全体で97名配置されている。各地区で体育指導委員と体育指導員の計4名体制を基本に協力して体育・スポーツ活動に携わっている。

(3) 体育振興会について

酒田市の体育・スポーツ団体として、財団法人酒田市体育協会(36加盟団体)、体育振興会、スポーツ少年団(21地区、2004年度小学生全児童数の36.3%が加入)、中学校・高等学校体育連盟、総合型地域スポーツクラブなどがある。

酒田市独自の体育・スポーツ団体として、各地区に設立した体育振興会について述べておく。

1960年代に体育指導委員の制度が、山形県から酒田市による委嘱となり、各小学校区に2名の体育指導委員が委嘱されたことから、組織作りが始まった。1966年7月にH体育振興会が誕生した。それをきっかけに、各地区に組織化をよびかけて他学区にも体育振興会が設立した。そして連絡機関として1974年に酒田市体育振興会連絡協議会が発足したが、1993年に酒田市体育振興会と改称した。(資料3)

現在、体育振興会は市内全地区に設けられ23団体ある。さらにそれを統括する酒田市体育振興会がある。体育振興会は1966年から1989年にかけて、体育指導委員らが中心となって各小学校区に設立されてきた。

体育振興会は全戸加入であり、会費は地区ごとに異なっている。

各地区体育振興会には市からの補助金があり、体育指導委員と3名の体育指導員の4名が中心となって活動を推進している。そして酒田市民体育祭などのスポーツ行事への協力や地域の活動の推進に貢献している。体育振興会は各地区ごとに特徴がある。

たとえば、ある体育振興会の年間活動を示すと、総会(4月)、自治会対抗大運動会(6月)、自治会対抗球技大会(10月)、グラウンドゴルフ大会(11月)、親善麻雀大会(2月)、理事研修会、会報の発行。他に、市民体育祭、市スポレク祭、市巡回駅伝、市民バレーボール大会、市民卓球大会など市の大会・行事への参加を行っている。そして、バレーボール、卓球、スポーツ少年団などいくつかの団体が活動している。

近年では、体育振興会の会費徴収の仕事を自治会の方をお願いするケースが多くなったことと、コミュニティ振興会が設立されて各事業に取り組みはじめたことによって、体育振興会がコミュニティ振興会の活動の体育・スポーツ部門的な位置づけをされるケースがでてきている。しかし、体育振興会は独自の役割があり、解消されることはない。

体育振興会の活動は小学校区という地域に根ざしている組織だけに、市民生活の身近なところで生涯スポーツを支える基盤となっていると、酒田市のスポーツ振興に位置づけられている。後に述べるように、総合型地域スポーツクラブの創設に関わっても、体育振興会は重要な意味をもっている。

Ⅳ. 酒田市の総合型地域スポーツクラブの設立経緯と現状

1. 酒田市における総合型地域スポーツクラブ育成の取り組み

(1) スポーツ行政における位置づけと施策

酒田市では2000年から「総合型地域スポーツクラブ事業」への取り組みを開始した。文部省（当時）の保健体育審議会などの動きから、総合型地域スポーツクラブのことは予想されたので早く動き出した。また、すでに隣接する山形県鶴岡市では国のモデル事業期間も終わっていたので、次の補助事業への対応も頭にあった。

こうした動きが、先に述べた「酒田市スポーツ振興計画」にも反映され、総合型地域スポーツクラブの創設、育成を重要課題として位置づけられた。

酒田市スポーツ振興計画中の「総合型地域スポーツクラブの設立と充実」の項目では、市民のスポーツニーズの多様化や少子高齢化社会を迎えた今日、年齢や性別に関係なく、だれでも参加できる仕組みを整えることで、多世代がそれぞれの技術・技能レベルに合わせて参加できるよう、中学校区単位の総合型地域スポーツクラブの創設を促進する必要があると述べている。

そして総合型地域スポーツクラブの創設と運営には、各地区体育振興会や各スポーツ団体、学校関係団体など主体となる団体は各地区の実状によるが、地域コミュニティ全体の理解と協力が不可欠である、としている。具体的な項目として、体育振興会の組織充実、総合型地域スポーツクラブ設立の啓発、総合型地域スポーツクラブの育成支援、県事業の積極的参加、NPO法人スポーツクラブへの支援、クラブディレクター・クラブマネージャーの育成、スポーツクラブの活動拠点の整備促進、である。（資料2. 4頁）

また、市モデル事業の他の中学校区域についても2004年度までに設立を検討し、クラブハウスや学校施設開放の利用、部活動への対応が考えられた。

こうした基本的な方針はクラブ設立後にも維持されている。2004年度の「教育委員会体育課運営方針」の「総合型地域スポーツクラブの創設支援と育成支援」でも、少子高齢化の進展、学校完全週五日制の実施への対応と生涯スポーツの振興を図るために、既設の総合型地域スポーツクラブへの運営、育成支援を行うほか、今後クラブ創設を目指す地区への創設支援を行うと述べている。（資料1）

(2) クラブ創設の取り組みと5クラブの設立

2000年、酒田市では「総合型地域スポーツクラブ事業」として市内の2地区をモデル地区として選定し、準備を開始した。モデル地区は中学校区とした。その理由はいくつかある。小学校区では小規模で、少子化によりチームスポーツや種目によっては成り立たないおそれがあった。また小学校区にはすでに体育振興会が存在していた。さらに国のモデル事業など他のケースで中学校区の先行事例があったことによる。

2地区が選定された背景は、1つは市の体育振興会長がいる地区であり、もう1つは市体育課の職員がいてはたらきかけたのである。地区では幾度となく勉強会を開催するほか、国のモデル事業としてすでにスタートしていた秋田県琴丘町のクラブの視察、スポーツ教室を開催した。市では地区の体育振興会もあるのでクラブへの単独補助をすることはなく、準備費用はそのつど講師謝礼金、教室開催費として市で負担した。

こうした準備期間をへて2002年にクラブが創設されたのである。

2002年から2003年にかけて酒田市には5つの総合型地域スポーツクラブが設立された。先

に述べたように、酒田市が総合型地域スポーツクラブ事業に取り組んだ結果、後に述べるように2年間の準備期間をへてB地区およびC地区にクラブが設立した。ほかの3クラブはまた異なる経緯でクラブができたのである。Eクラブは酒田市体育協会が設立した。またすでにA地区で設立していたAクラブが市の呼びかけに応じて総合型地域スポーツクラブに移行した。またD地区のコミュニティ振興会の活動からDクラブが設立した。

これらの5クラブの設立経緯をみると、体育協会、体育振興会やコミュニティ振興会等、既存の団体や地域組織を活かしながらの設立、学校週五日制導入に伴う部活動補完を目的として学校PTAが立ち上げたクラブなどがあり、それぞれの地域の実情やニーズをもとに設立されていることがわかる。

以下、5クラブの設立経緯と現状について、それぞれ調査結果を述べることにする。また結果をまとめた表2を参照されたい。(表2. 酒田市の総合型地域スポーツクラブの概要)。

2. Aクラブ—学校と連携し中学校部活動を地域で補完する

1. 設立の経緯

Aクラブは中学校の部活動の衰退を心配したPTA・保護者たちが、学校と相談しながら立ち上げたクラブである。

酒田市立A中学校では、1998年頃から学校部活動で、生徒数減少によるチーム編成の困難や、新入部員が入らずに休部、廃部を考えなければならない部活動がでてきた。また、教員の減少により部活動顧問の担当者が不在になった。そして、完全学校週五日制が2002年4月から実施された場合に、部活動はいったいどうなるのかといった不安の声が保護者や教員からあがってきた。

少子化による生徒数の減少や学校週五日制の導入によって、A中学校の生徒の部活動と週末の過ごし方に様々な問題が見えてきた。そこで当時の学校長とPTA会長でありサッカー部のコーチでもあったI氏らとの話の中で、今後の部活動のあり方について考える会をもとうということになった。そして対策を検討するために学校、PTA理事、部活動顧問、部活動外部指導者、部活動保護者会等のメンバーによって組織された「A中部活動検討委員会」が立ち上げられた。

その当時は、部員が減り、活動が成り立たなくなると内部規定によって休部や廃部とされ、部活動が減少していく一方であった。その後2年間、学校長も替わり、メンバーも入れ替わりながら、委員会は年3回ほど開催された。しかし、なかなか結論は出なかった。

そして2000年になり、委員会設立当初のメンバーのうち、委員を続けていた数名が、学校とは一線を画した組織を作ってはどうかと提起した。結論に至らない部活動検討委員会の状況を打開するためである。そして検討を重ねた結果、生徒たちの新たな受け皿を創ろうということになった。委員会とは別に何度も話し合いを重ねた。そして、せっかく新組織を創るならば、A中学校生徒のみならず地域の誰もが参加できるものにしようとして「Aクラブ」の設立案をつかった。名称の「A」は、一父兄が名付けた地区の通称である。

会則の作成等には、弁護士であるメンバーが協力してくれた。彼は現在も副会長の一人で無報酬の顧問弁護士である。(資料21)そして学校側とA中部活動委員会の了承を受け、A中学校の保護者へ設立準備委員会として説明会を行った。そしてA中学校の保護者や学校関係者、地域の人たちの理解と賛同を得て、2000年に設立総会を開催し、クラブが設立された。クラブ立ち上げは、学校や保護者の理解と協力のもとで行われた。

Aクラブ設立については、教員は人事異動によって替わるし、話し合いばかりで何も進展し

ないことに業を煮やして行動した、というのが本当のところである。

クラブの設立趣旨は、A中学区の地域を基盤に、児童生徒のみならず大人の住民までを対象に体育や文化の活動を推進し、地域の健康と文化の発展に貢献するというものである。この趣旨は、総合型地域スポーツクラブの考え方に共通するところがある。

しかし、設立当初は総合型地域スポーツクラブのことやtotoのことなど聞いたこともなければ、補助や助成の対象になるなどとも考えてもいなかった。設立趣旨や目的はあくまでも理想として、実際はA中学生の部活動の補完的活動であった。しかしその後、少数ではあるが保護者や卒業生が入会してくれ、指導員もそれまでの部活動外部指導員に加え、各種目に地域の優秀な指導員が入会してくれるようになった。

2000年より会費収入だけでの活動を続けていたが、2002年9月に酒田市教育委員会体育課から声をかけられた。Aクラブの趣旨と活動は、総合型地域スポーツクラブの活動と認められるかもしれないので、書類を準備して申請してみてもどうかとの提案を受けた。当時、酒田市では2つの中学校区が市の育成モデル事業に指定され、クラブ設立に向けて準備を進めていた。そこに既に活動を始めているAクラブも加わらないかという提案であった。

Aクラブで書類を準備して申請したところ、12月に2002年度分として138万円の助成を受けることが決定した。当初は会費だけの約40数万円位の予算で活動していたので、これには驚き、嬉しかった。早速会員皆で使用できるトレーニング機器や不足していた用具類を揃えた。(資料21)

以後、現在に至るまでAクラブは通常の活動に加えて、各種大会や交流会を開催するなど活発な活動を続けている。2004年11月には、活動実績が認められて、「平成16年度山形県スポーツ賞 地域スポーツ振興賞」を受賞した。総合型地域スポーツクラブとしては初の受賞である。

Aクラブは、今後、活動種目の充実を図り、幅広い年代の会員が集まる地域の体育文化活動の拠点となるよう、将来のNPO法人化も視野に入れて関係機関や地域住民の協力のもと運営に当たっていきたいとしている。(資料23)

2. 設立年月

2000年11月25日設立

3. クラブの目的

Aクラブは、「A中学校区において児童生徒及び学区住民の健康と文化の向上のために、子供から大人まで誰もが楽しめる体育文化活動を支援・実施することを目的」としている。(資料20. 第一. 3)

4. 会員の資格

「A中学校の生徒、生徒の保護者、教職員、学区内外の有志（児童生徒を含）、学区内外の各種スポーツおよび各種文化活動の指導者、指導経験者、専門技術や専門知識取得者のうち、Aクラブの設立主旨に賛同した」人から構成される。(第二. 5)

中学生以下の会員の活動場所への移動は保護者の責任で送迎するよう会則で規定されている。(資料21)

5. 会員について

(1) 会員数

2004年の会員数は259名である。男性181名（69.9%）、女性78名（30.1%）

現在、会員の約80%がA中学校の生徒である。指導員も会員に数えられ、会費は免除して

表2 酒田市の総合型地域スポーツクラブの概要

名称	Aクラブ	Bクラブ
対象地域（生徒数）	A中学校区（生徒数271名） 市街地域で古くからの住宅街。人口約15000人	B中学校区（生徒数164名） 農村地域。人口約5800人
設立年月日	2000・11・25	2002・9・7
設立の経緯	・平成10年からの議論を経て、中学校部活動を検討する保護者達が中心となって設立した ・市の呼びかけに応じ2002年から総合型クラブへ移行	・平成12年に市モデル事業の指定を受け創設に向け運営委員会を構成 ・地区で話し合いながら3地区体育振興会をベースに立ち上げた
特徴	・部活動同一8種目。第2、4土日、週1平日夜間に活動 ・中学生が8割で成人は大半が指導者である	・3地区の体育振興会をベースにクラブを作った ・歴史的にまとまりやすいという地域性 ・地域的・人的条件が深く関わっている ・高齢者の軽スポーツとスポ少が主体
規約・目的	多世代の住民を対象に体育、文化活動を推進	健康、体力の維持増進と、親睦を図り地域社会の連帯感向上
活動内容	8種目。活動は第2、4土日、平日夜間 バスケットボール 剣道 バレーボール 野球 ソフトテニス 体操 サッカー 卓球	10種目。活動は3地区ごと。水を除き午後、夜間 グラウンドゴルフ 本鼓 ゲートボール 野球 ウォーキング 剣道 バレーボール 卓球 ソフトバレーボール 社交ダンス
行事、交流活動	・バスケットボール交流大会 県内外20チーム ・幼児サッカー教室 ・バレーボール交流大会	・クラブフェスティバル年1回 ・グラウンドゴルフ、ゲートボール、バレーボール月例会 ・ダンス交流クリスマスパーティー
参加率・継続率	高い	高い
施設	A中体育施設、市体育施設	B中、B1小、B2小体育施設
クラブハウス	A中体育館内	B1・B2・B3公民館 B中体育館横
会員1)会員数	2002年 209名（男123、女86） 2003年 285名（男163、女102） 2004年 258名（男181、女78） 2005年 約200名	2002年 218名（男111、女107） 2003年 550名（男308、女242） 2004年 約550名 2005年 約570名
2)世帯数	220世帯	216世帯
3)会員募集・広報	学校経由でパンフレットを配布	年1回地区広報に折り込んで全戸配布
組織運営	総会 年1回 理事会 16名 役員会 指導員会議 隔月開催 指導員数 36名	総代会 年1回 3地区代議員計60名 理事会 年2回 運営委員会 不定期 指導員数 37名
財政 予算(補助金) (万円)	2002年 180(138) 2003年 180(122) 2004年 240(107) 2005年 228(80)	2002年 188(129) 2003年 318(193) 2004年 216(72) 2005年 146(0)
会費(円)	入会金(500)、年会費(中学生1500、高校生2500) 全会員保険加入	年会費(1000)、種目別会費(1000/種目) 全会員保険加入
他のスポーツ団体、地域組織、学校との関係	・スポ少との交流あり ・中学校部活動との関係が強い	・スポ少は2003年より取り込んだ ・中学校部活動は平成18年度へ向け協議中 ・体育振興会との関係が強い
活動への評価	・子ども達を地域で育てるという意識が生まれた ・地域の子も達へのスポーツ普及 ・各種大会を開催して他地域との交流	・地域へのスポーツ普及と参加機会の増加 ・地区内及び3地区間の交流の拡大 ・施設が豊富で有効に活用できている
今後の課題	・種目数を増やしたいが施設面で限界 ・文化活動への取り組み ・成人の会員層の獲得が課題である	・新しい種目への拡大 ・クラブハウスの維持管理と活用 ・壮年の会員確保

Cクラブ	Dクラブ	Eクラブ
<p>C中学校区（生徒数410名） 市街地域。新興住宅街。人口約12700人 2002・9・28</p> <ul style="list-style-type: none"> 平成12年に市モデル事業の指定を受け創設に向け運営委員会を構成 議論を重ねながら既存の組織団体を崩さないでクラブをつくり取り組んだ 家族的な雰囲気でも楽しく活動 陸スポーツ主体で複数種目にも取り組む 家族会員制度もある <p>健康、体力の維持増進と視聴を図る。 地域のスポーツ環境基盤づくり</p> <p>8種目。土日、平日夜間、隔週開催 グラウンドゴルフ ソフトテニス ラージボール卓球 バウンドテニス バドミントン ウォーキング ソフトバレーボール インディアカ</p> <ul style="list-style-type: none"> グラウンドゴルフ、ラージボール卓球大会 各種目大会後反省会で交流 グラウンドゴルフ講習会(女子中学生対象) <p>1回あたり15～20名の参加がある</p> <p>C中、C1小、C2小、C3小体育施設 市営体育施設 C中体育館内</p> <p>2002年 74名 2003年 96名 2004年 121名（個人48、家族73名） 2005年 79名 68世帯 体育振興会の協力を得てチラシを全戸配布 3地区体育振興会、事務局長が役員任務</p> <p>指導員数 28名</p> <p>2002年 173(124) 2003年 174(119) 2004年 80(40) 2005年 137(82) *予定</p> <p>入会金(500)、年会費(個人3000、家族5000) 保険料(1500)</p> <ul style="list-style-type: none"> スポ少とは別組織である 中学校部活動とは別組織である 体育振興会からの協力を得ている ストレス解消、健康増進の効果が現れている 家族的な雰囲気でも楽しくプレーしている 複数種目に取り組むきっかけを作っている 愛好会等の加入による会員及び指導員の確保 財源確保のための会費の設定 	<p>D中学校区（生徒数676名） 市街地域。新興住宅街。人口約18500人 2003・3・15</p> <ul style="list-style-type: none"> 「健康さかた21計画」の中心となっていたコミュニティ振興会が市からの提案を受け、2003年に総合型クラブを立ち上げた 2005年にtotoを辞退し、コミュニティ振興会の体育部門となった コミュニティ振興会の体育部門位置づいている 複数種目のプログラムがある 各々のレベルに応じて活動ができる <p>健康、体力の維持増進と視聴を図る。 地域のスポーツ環境基盤づくり</p> <p>11種目。月～土午前、夜間 グラウンドゴルフ 卓球 ソフトバレーボール 剣道 バウンドテニス バレーボール ウォーキング エアロビクス(ジュニア/大人) フットサル 社交ダンス 健康体操</p> <ul style="list-style-type: none"> グラウンドゴルフ月例会、競技会 社交ダンス交流クリスマス大会 各種目交流大会、反省会 <p>高い</p> <p>D中、D1小、D2、D3小体育施設 市営体育施設 D1小体育館内</p> <p>2002年 — 2003年 404名（男191、女213） 2004年 500名 2005年 450名 391世帯 コミュニティ振興会の組織を活用してチラシを全戸配布 総代会 年1回 3小学校区会員より15名 理事会 年2回 運営委員会 不定期</p> <p>講師3名(エアロビクス、健康体操、社交ダンス)</p> <p>2002年 — 2003年 315(209) 2004年 — 2005年 105 (0)</p> <p>年会費(1500)、別会費(エアロビクス、健康体操3000、社交ダンス8000)</p> <ul style="list-style-type: none"> スポ少との連携は行っていない 中学校部活動との連携は行っていない コミュニティ振興会との関係が強い 多くのスポーツコースによってスポーツ振興に貢献 高齢者の健康づくりと社会参加、生きがいづくり 自主運営等、運営は円滑に進んでいる 新しい種目への拡大 活動施設の不足 若年層の会員確保が課題である 	<p>酒田市全域 2002・12・28</p> <ul style="list-style-type: none"> 市からの話を受けて市体協での議論から、固有の実績がある4種目が参加して立ち上げた 設立には少子化、指導者不足の背景がある 市体協加盟団体がジュニアからの指導と普及に取り組んでいる 技術習得練習を中心に種目ごとに活動 一貫指導による競技力向上および児童生徒の心身の健全育成を目指す <p>4種目。活動は各種目ごと土日中心 SRKジュニアクラブ(陸上) 野球教室(ハーバーベースボールクラブ) 酒田ジュニアテニスクラブ 中学生バスケットボール教室</p> <ul style="list-style-type: none"> 統一した活動はなし。 各種目交流大会 <p>高い</p> <p>市営体育施設 なし</p> <p>2002年 330名（男178、女152） 2003年 300名（男185、女115） 2004年 344名（男178、女166） 2005年 378名 全市 各学校長宛に申し込み用紙配布 通常総会 年1回 運営委員会 年2回 23名 幹事会 不定期</p> <p>指導者 42名</p> <p>2002年 147(117) 2003年 165(105) 2004年 161 (80) 2005年 155 (60)</p> <p>年会費(2000) 保険料(500)</p> <ul style="list-style-type: none"> 学校、スポ少の理解を得る努力をしている 中学校部活動とは指導者を介して連携 市体協との関係は強い スポーツを行うことの喜び、感動を子ども達に与えることができる 少子化時代の競技スポーツ指導に貢献 中学以降の競技人口の底辺拡大 大会参加の際の登録問題 スポ少にない種目等、種目への拡大 指導者の養成に力を入れていきたい

いるが指導は依頼するというかたちである。

2005年は近接する他中学校にサッカー部がないこともあって、学校長同士の確認のもと、Aクラブの活動に参加している生徒たちもいる。

学校部活動との連携によりクラブとしては、毎年ある程度新規会員数が予測できるというメリットもある。(資料21)

(2) 性別

サッカーや野球種目があるためか、男女比は6：4で男性の方が多い。

(3) 年齢

2004年の年齢別構成は以下のとおりである。幼児から60歳代までいる。中学生が約80%を占め、成人は大半が指導者である。

18歳未満	218名 (84.2%)
18歳以上40歳未満	17名 (6.6%)
40歳以上60歳未満	24名 (9.3%)
65歳以上	0名 (0%)

計259名となっている。

(4) 職業構成

中学生が大半を占める。成人は指導者である。

6. 入会募集と広報

生徒には学校側から会員募集案内のパンフレットで募集する。会員募集の対象は基本的にA中学区の住民である。

クラブ加入は自由(希望制)であるが、現在各種目とも団体・チームの部活動所属生徒はほぼ全員がクラブにも加入している。

山形県教育委員会には、県のホームページへの掲載や活動への理解をしてもらっている。(資料21)

7. 入会目的、きっかけ

部活動と同一種目であり、自然に入っている。

8. 参加率・継続率

参加率は100%に近い。具合が悪い時などは、無理をせず休めと言うくらいである。

継続率も高い水準である。バスケットやソフトテニスでは、中学校を卒業してからもクラブで活動する生徒がいる。

9. 会費

会員からは入会金(500円)、年会費(中学生以下1,500円、高校生以上2,500円)を徴収する。

クラブの活動を部活動の延長と思い、会費の必要なことを不審に思う一部の保護者がいるので、理解を求めていく。

また活動中の事故に対応するため、全会員がスポーツ傷害保険に加入している。保険金は年会費に含まれクラブ運営会計から支払っている。(資料21)

10. 財政

運営経費は会員からの入会金、年会費、酒田市からのtoto補助金、寄付金等の収入から支出している。活動時の経費について、学校側からは一切の経費は支払われていない。

2002年度からは「酒田市総合型地域スポーツクラブ活動支援事業」の補助対象クラブとなり、現在まで3年間にわたり toto の補助金を受けて各種活動、事業を展開してきた。(資料23)

toto の補助金は、2002年は1,376,000円(依存率/76.6%),2003年は1,220,000円(依存率/67.9%),2004年は1,070,000円,2005年は800,000円であった。5年間の予定であるが、2006年度は不明である。toto の補助金がなくなると、現在の会費収入のみでは運営は難しくなる心配がある。

助成を受けたことによる効果は、会員募集や大会開催の参加案内に関して toto の助成を受けている団体という安心感を得ることができた。また、備品やスポーツ用具購入に対する助成のおかげで各種目の活動が充実し、体力、競技力の向上が図られた。また、toto の助成を受けているということが指導員の自覚や責任感を高めている。(資料21)

指導者やクラブマネージャーへの謝礼金は、toto の補助対象になるので支給しているが、toto が終了となった後の財政のことも考え、了解を得てクラブに寄付してもらっている。

11. 組織運営体制

組織運営は「総会」「理事会」「役員会」「指導員会議」を組織、構成している。4月に総会、2ヶ月に1度の割合で指導員会議を開催し、運営方針を決定している。

総会のほか定期的に役員指導員会議を開いて運営にあたっているが、各種目ごとの予算配分や施設利用時間の割り当て、その他クラブ運営全般に関する事項についても役員指導員会議がクラブの意思決定機関となっている。(資料23)

Aクラブには、会長1名、副会長3名、理事6名、部会長若干名、顧問若干名、会計係2名、監事2名の役員が置かれている。各種目代表に1名ずつ理事に入ってもらっている。役員の任期は1年間とし、定時総会で選任もしくは再任される。A中校長、PTA会長、教員、後援会長は自動的に顧問となる。(第三.8)

会計は知識が必要なこともあり、銀行関係者の会員に就いてもらっている。

会員からの評価は意見箱を設置し、役員会、指導員会議で公開し、意見への対応を検討している。

12. クラブハウス、事務所

酒田市立A中学校体育館ミーティングルーム

事務局は酒田市立A中学校体育館内クラブハウスに設置されている。(資料20.第三.11)

13. 拠点施設、用具

活動拠点としてクラブハウスの設置を含め、A中学校の各体育施設を使用して活動している。学校開放を優先的に利用させてもらって確保している。

活動拠点は、A中体育館、武道場、グラウンド、テニスコート、ミーティングルーム、体育館アリーナ部分正規バスケットボールコート2面などが使用されている。

学校開放の制度を活用しており、使用料は無料である。しかし必要に応じて近隣の各公共施設(有料)も使用している。

用具等は学校側と持ちつ持たれつで使用している。クラブ所有のトレーニング機器を一教室を空けてもらって入れてあり、部活動でも活用してもらっている。(資料21)しかし、クラブ活動日の土、日曜日は教室はシャッターが降りていて入れず、利用できないという矛盾もある。

14. 活動内容

活動は平日の19時から21時および、第2,第4土、日曜日の午前、午後である。夏季と冬季のスケジュールに割り振られている。夏季(4月~10月)と冬季(11月~3月)で、土、

日曜日の活動に変更がある。

2005年は8種目が定期的に活動している。内容は、野球、剣道、バスケットボール（男・女）、ソフトテニス（男・女）、バレーボール（男・女）、体操、卓球、サッカーである。体操のみ酒田市全域を対象としている。体操は小学生の会員が多い。

部員が少なく休部していた男子バレーボール部のように復活した種目もある。

以前は部活動とクラブで異なる種目に取り組む生徒もいたが、現在はいない。

冬季間のA中体育館の使用調整が困難なこともあり、今現在の種目数増加は厳しい。

15. 指導者

8種目において、部活動が休みとなる第2、第4土、日曜日の半日と週1回の夜間2時間をクラブ所属の指導員が指導にあっている。

部活動とクラブはあくまでも別な組織で運営しているため、クラブでの指導は役員会に諮ったうえでクラブマネージャーが委任した指導員である。基本的には部活動顧問はクラブの指導員にはなれない。クラブの指導員の中で部活動外部指導者を兼任している者は酒田市教育委員会からの外部指導者の委嘱を受けている。

指導者は基本的に地域の住民及びA中OB、OG等の関係者に依頼している。（資料21）

指導者はクラブマネージャー2名を含め、2005年は36名である。うち、女性は2名である。クラブ立ち上げの時は27名程度であった。2005年の8種目の指導員数は以下の通りである。

野球4名、剣道3名、バスケットボール7名、ソフトテニス5名、バレーボール4名、体操3名、卓球2名、サッカー6名である。（資料22. 指導員名簿）

近年、指導者の資格も問われるようになってきているので、機会があれば資格を取得してもらいたい。

指導者への謝礼金については、活動日数に応じて年度末に一括して謝礼金を支払っているが、地域において総合型地域スポーツクラブに対する認識、特に受益者負担への認識が高まるまでは、運営に必要な会費の適正金額への増額が難しいこともあり、指導員全員が自らの意思により全額を次年度以降のクラブ運営のために寄付金として納入してくれている。

しばしば保護者会が部活動の面倒を見るケースがあるが、保護者の場合、子どもが卒業すると辞めてしまうことになりやすく続かなくなる。クラブの場合は指導者が続けるのでよい。

16. 行事、交流活動

通常の活動以外にも清掃ボランティア活動、スポーツ教室、大会の開催や各種講習会の開催などを活発に行っている。以下のような事業及び活動は、役員指導員会議で審議のうえ承認を得て行われるものである。（資料23）

2004年度4月の総会当日に会員全員でA中学校内及び周辺の一斉清掃ボランティア活動を実施した。これには180名程が参加した。

クラブのレベルを上げたいという思いから2002年度から継続して「toto Aクラブ・バスケットボール交流大会」を開催している。2003年度までは県内チームを招待してのバスケットクリニックと交流試合を開催していたが、2004年度からは、県外からの強豪チームも出場する「Aクラブ・totoカップバスケットボール大会」と名称を変更した。2005年度は男女20チームが参加した。

2005年度は、前年度の段階で来年もと声をかけられ春から準備してきた。totoカップはクラブの大会であるので、学校長の管轄外であり印がもらえない。そのためクラブ会長名で学校

経由で案内を出している。相手校でも顧問や学校長の理解があるところとないところがあるので簡単ではない。

この大会にはバスケットボール協会から審判などの協力をしていただいている。この点はクラブ指導者の中にバスケットボール協会関係者がいることが大きい。大会運営もスムーズに行われ、多くの選手、指導者、父兄間の交流の場ともなった。(資料23)

また幼児サッカー教室を通年開催している。子ども達への普及活動として2003年度から学区内保育園児、幼稚園児対象のU-6(6歳以下)サッカー教室を開催した。保護者の通年でやってほしいとの強い要望から6月から翌2月までの期間開催することとなった。

学区内2つのサッカースポーツ少年団指導者の協力を得て、2003年度は11月～2月に、2004年度は6月～2月の第2、第4日曜日に開催したが好評である。学区内幼稚園、保育園から早くも来年度の教室開催への問い合わせがきているほどAクラブの活動が認知されてきた。サッカーを通して幼児の基礎運動能力の向上に寄与できたと評価している。(資料23)

2003年度から学区内スポーツ少年団(2つの小学校区)とクラブのサッカー交流会を開催している。

2004年には「全日本ユース(U-15)フットサル山形県大会」にAクラブチームとして初出場した。このAサッカークラブの活動は中学校地区総体敗退後の3年生の受け皿ともなっている。

2004年度に県内外のチームを招待して地区バレーボール協会の協力を得て「Aクラブ・バレーボール強化練習交流大会」を開催した。2004年は12チームの参加があった。いずれはバスケットボールのようにカップ争奪大会にしたいと考えている。(資料23)

2004年10月に日本体育協会の子どもの体力向上キャンペーン「スポーツ選手ふれあい指導事業 庄司智久の野球教室」を市営光ヶ丘野球場で主催した。会員及び参加を呼びかけた学区内外の野球スポーツ少年団員や、他の中学校の野球部員、指導者など約200名が参加し、めったに経験のできない元プロ野球選手の指導を受けることができた。(資料23)

Aクラブでは上記のような幼児サッカー教室、バスケットボール大会等の開催により、地域内外へクラブの活動をおおいにアピールできたと評価している。(資料23)

17. 他クラブ、他団体との関係

2004年8月に、「全日本ユース(U-15)フットサル山形県大会」に初めてAサッカークラブとして参加した。しかし、現在はまだ団体種目においても人数が揃い、A中学校チームとして参加できるので他の種目での出場はない。

またクラブとしての大会参加は非常に限られているので、会員のクラブの一員との認識が薄いということにもつながっている。(資料21)

中学校部活動では部活動全員加入原則である。剣道、卓球部の部員はそのような事情で入部している生徒もいることから、Aクラブには入会しない生徒もいる。

18. 地域との関係

A中学区内の保育園、幼稚園児対象の幼児サッカー教室を通年開催している。

クラブの指導者や大人たちは、中学生を地域の子として知るようになり挨拶もするようになった。

19. クラブの現状の評価と今後の課題

良いところは次の点である。2003年度までのバスケットボール交流大会を2004年度から「Aクラブ・totoカップ大会」とし、2005年度は県内外20チームの参加を得て盛大に開催された。

Aクラブの活動はもとよりtotoのPRにもなったと考えられる。

スポーツ選手ふれあい指導事業野球教室の開催により、元プロ野球選手の指導を受け、Aクラブの会員のみならず、地域の小中学生、指導者にめったにできない経験と感激された。

2004年度には県内外男女計12チームによるバレーボール強化練習会の開催により、各々のレベルアップが図られたとともに、交流を深めることができた。(資料23)

学校・PTAが主体となって設立した経緯から、学校側もクラブの活動に対し理解を示してくれている。また、クラブの活動は地域によるA中学校生徒のための教育活動と認識のうえ、学校長が顧問にもなってくれている。PTAも同じ理由から活動に理解を示してくれている。(資料21)

Aクラブを部活動とは別のものとして、総合型地域スポーツクラブとしたことはよかった。総合型地域スポーツクラブと名乗ったことは、「Aクラブ」より名称として判りやすく、totoの補助も受けられるなど信用度が違うといえる。

クラブに参加する生徒にとってのメリットとしては、部活動とは違う種目に参加できること、A中の先輩等、地域の大人からスポーツ及び生活面での指導を受けられることがあげられる。また部活動の場合、専門外の教員が顧問となる場合も多いが、クラブでは専門指導員から指導や助言が受けられる。また生徒達には高校進学でのスポーツ推薦を含めた進路決定に関して、各スポーツ団体に所属している指導員とも相談ができ、アドバイスを受けられると喜ばれている。(資料21)

学校・教員等学校関係者にとってのメリットとしては、顧問の教員達の休日確保、部活動とクラブでの練習メニューの共用等による技術力、競技力のレベルアップが挙げられる。

保護者の受け止め方としては、A中の先輩や地域の大人からスポーツの指導だけでなく、生活面での指導も受けられると評価されている。また、夜間の活動に関しては保護者の送迎を原則としているが、大変だと声が出るのではなく、逆に活動の見学などで保護者同士の関係が深まるとの肯定的な意見が多い。

学校部活動との連携により、スポーツの指導のみならず、地域で子ども達を見守ろうという意識が芽生え、指導員の人間性の向上にもつながっている。(資料21)

これから市内中学校の統廃合の動きがあるが、部活動の問題は深刻化し、ますますAクラブのような存在が必要となるかもしれない。

今後の課題は次の点である。学校長、教頭、部活動顧問をはじめとする学校関係者、部活動保護者会との連絡を密にして、信頼関係を築くことが重要である。部活動顧問とクラブ指導員との間の信頼関係が、教員の人事異動によって顧問が替わるたび改めて築き直さなければならない。

クラブの課題はtoto終了後の財政確保と自主運営に向けての取り組みである。これには賛助会員の募集、会費の値上げ等が考えられる。現在は、補助金に助けられての運営を続けているが、Aクラブのサポーターとして地域企業や個人の賛助会員を募集するなど、会費の見直しも含めて自主運営に近づく努力が必要と考えている。(資料23)

以前からの構想として軽スポーツ教室や文化活動教室を開設して幅広い年代で会員を増やしたいと考えているが、活動拠点としているA中学校は現在セキュリティの問題等があり、体育施設以外は使用できない。現時点でできることとして、ソフトテニスや卓球、剣道などで中学生以外の会員を増やす努力を行っているが、本来の総合型地域スポーツクラブの姿や、Aクラブ設立の主旨に近づく意味でも新たな教室(種目)の開設が必要と考えている。(資料23)

まず、文化活動への展開は課題である。音楽、美術の教員から文化活動にも取り組んでほしいとの声がある。活動を文化面でも広げていくためにも教室を開放してくれるとよいのだが、セキュリティの問題から夜間や土、日曜日、祝日の開放は難しい状況である。A中学校には施設利用の便宜を図ってもらっているものの、活動を拡大しようとするとも施設面が不足し、これがネックとなっている。課題をクリアして空き教室を利用させてもらえればと思っている。

また、中学生以外の会員増加も課題の1つである。現在の会員構成のうち約80%以上がA中学校生徒で、一般成人の会員が少ないことが設立以来の課題となっている。会員を一般成人に広げていきたいが、この点でも現在の施設利用状況では限界である。やはり学校の教室の開放が期待される。

学校・教員等学校関係者にとってのデメリットとしては、部活動に熱心な顧問の場合、クラブの活動日に指導できない不満がある。(資料21)

しかし、以上のようにA中学校生徒以外の会員増強や活動施設の確保等の課題があるが、運営基盤はしっかりしてきた。(資料23)

20. 市への要望

酒田市教育委員会からはtoto補助金の交付や学校以外の施設利用に対する減免処置等全面的に支援を受けている。(資料21)しかし、今後市へは独自助成金をお願いしたい。20～30万円でもよいので市独自の助成制度をつくってほしい。しかし今のところ市は出すつもりはないようである。

3. Bクラブ—3地区の体育振興会をボトムアップしたクラブづくり

1. 設立の経緯

Bクラブは、2000年に酒田市の呼びかけに応じて総合型地域スポーツクラブの創設に向けてスタートし、地域で話し合いながら準備を重ね、2002年に設立した。会議を重ね、アンケートや説明会を実施して、地域住民に理解を求めた努力をした。

まず、地区の体育振興会役員、体育指導委員、学校長、婦人会、老人クラブの代表者などからなる運営委員会を構成した。運営委員会はクラブ設立まで、およそ2年間の準備期間に13回の運営委員会のほか、種目別の会議を開催した。

その間に、すでにモデル事業として先行していた秋田県琴丘町のクラブの視察を行った(7月)。琴丘町は同程度の人口規模であったこともあって参考にしたのである。10月から勉強会を開始した。山形県主催の研修会へも参加した。

また、住民の実態や要望を把握するため、地区で1,000名ほどを対象にしたアンケート調査を実施して、95%くらいの回収率をえた。

totoの補助金申請をしながら、時間をかけて地域で話し合い、浸透を図っていった。

総合型地域スポーツクラブを立ち上げるにあたっては、既にあった地区単位の体育振興会のクラブを解体するのではなく、今までのものを生かしながら、その集合体としてクラブを作ろうということになった。

住民からは体育振興会とクラブはどう違うのかという疑問などが出された。

地域の老若男女すべての人が、さまざまなスポーツを楽しみながら、B1、B2、B3の3地区の交流を図れることは、大変意義深く、レベルの向上はもとより、健康増進、地域の活性化につながるものと期待されている。

B中学校区はC中学校区とともに、市の最初のモデル事業となった。それはなぜか。B中学校区が、最初に総合型地域スポーツクラブ創設に取り組むことになった背景には、人的、地域的な条件があった。

当時の体育振興会の会長は、B1地区のTS氏（兼B1公民館長）であった。またB3地区のSS氏（兼B3公民館長）が酒田市体育指導委員会会長であり、懇意な間柄であった。

さらに、中学校区にクラブをつくるという場合に、3地区からなるB中学校区は、歴史的にもまとまりがよいという特徴があった。この人脈と中学校区で総合型地域スポーツクラブを立ち上げるといふ市の方針があいまってモデル事業としての指定を受けた。

2. 設立年月

2002年9月7日設立

3. クラブの目的

Bクラブは、「日常生活の中で自発的にスポーツを楽しみ、各自の健康、体力を維持増進するとともに、会員相互の親睦を図り、地域社会の連帯と明るく豊かな生活の実現に資することを目的」としている。（資料9. 第3条）

また、規約中の第4条―事業（6）には、スポーツ活動とともに文化活動にも取り組もうという考え方がある。これは設立準備の過程で、学校や運営委員の中から出てきたことである。クラブの活動に、スポーツ少年団も取り込んでいくが、中には運動嫌いの子もいるので、文化活動などに参加するのもよいという考えからである。

4. 会員の資格

「原則としてB中学校区内の居住者若しくは主旨に賛同した」人から構成される（第5条）。太鼓やソフトバレーボールには、目的に賛同してクラブに参加する他地区の人もいる。

5. 会員について

（1）会員数

2002年の会員数は218名である。男性111名（50.9%）、女性107名（49.1%）

2003年の会員数は550名である。男性308名（56.0%）、女性242名（44.0%）

2004年の会員数は約550名である。

2005年の会員数は約570名である。

構成はバラエティに富んでいる。地区別ではB2地区95名（22.5%）、B1地区は195名（46.2%）、B3地区は132名（31.3%）である。

（2）性別

男女比は半々くらいであるが、男性の方が少し多い。

（3）年齢

2005年の年齢別構成は以下のとおりである。小中学生、高齢者の比率に比べ、壮年層の会員数が少ないのが現状である。

小中学生	148名（31.6%）
～20歳	1名（0.2%）
21～29歳	18名（3.8%）
30～39歳	37名（7.9%）
40～59歳	84名（17.9%）
60歳～	180名（38.5%）

計 468 名となっている。

(4) 職業構成

以前は農業従事者の方が多かったが、近年はサラリーマンの方が増えてきている。種目においても、最近ではゴルフの愛好者が増え、2004年からはクラブ内の同好会もできた。近年、新しい種目への取り組みや会員層の変化がみられている。

6. 入会募集と広報

クラブ加入の呼びかけは、年1回は全戸に周知するようにして行っている。

クラブの予算なども折り込みで行っている。

7. 入会目的、きっかけ

クラブに入会する目的は、健康づくりと仲間づくりである。同じ地区の住民でも仕事が変わっているため、日常的な交流はあまりない。クラブはそうした人たちが出会い交流する場となっている。

8. 参加率・継続率

参加率、継続率はともに高い水準である。

9. 会費

会員からは、年会費（1,000円）、種目別会費（1,000円/種目）、保険料を徴収する。

年会費は以前は500円であったが、少なくともおかしいという声もあり、現在は年1,000円である。グラウンドゴルフのようにあまり経費がかからない種目、あるいは、行う時にその都度支払う種目や、ダンスのように講師謝礼を支払う種目があり、平均して1,000円にしている。他に種目に入っているごとに1,000円を集めている。

お金を払ってクラブで運動・スポーツをして健康を保つという意識は低いように思う。

10. 財政

totoの補助金は、設立の2002年は1,286,000円（依存率/69.3%）、2003年は1,930,000円（依存率/61.1%）であった。

totoの補助金は5年間あると聞いていたが、2003年で終わってしまい2004年には出なかった。そのため2004年の1年間は市が特別に補助をした。（資料29,30）2005年は補助金もなく、自主財源による運営に移行している。totoの補助金は魅力であったが、今後市では補助金を出すつもりはなさそうである。

11. 組織運営体制

「役員」は、会長1名、副会長2名、理事15名、監事3名の計21名である（第8条）。組織運営面でも地区ごとの体制を尊重しており、種目別代表、体育指導委員、体育振興会のメンバーなどから選出されている。

「総代会」は毎年1回以上開催する。各地区20名の代議員で計60名で構成される（第4章）。

「理事会」は、会長、副会長、理事で構成され、年2回以上開催される（第5章）。

日常的な活動は、「運営委員会」で運営される（第7章）。運営委員会は、専門部会と種目別代表者部会で組織される（運営規則第7条）。運営委員会の時期は不定期で、必要に応じて召集する。

12. クラブハウス、事務所

B中学校ミーティングルーム

2004年にtotoの補助金を得てクラブハウスを設立した。これには市からの持ち出しもあった。クラブハウスはB中学校内にあり、体育館の通路と続いている。指導者の打ち合わせや、

利用者のミーティング等に利用されている。

電話やコピー機を設置しているが、機器のリース代が年間20万円くらいかかり、負担となっている。クラブハウス運営費の確保と改善が今後の課題である。

事務局は北部農民センター・B1公民館内に置かれている。

13. 拠点施設、用具

活動拠点は、B中学校、B1小学校、B2小学校の体育館・グラウンドや、B3、B1、B2の公民館、市営体育施設などが使用されている。

学校施設は学校開放制度を活用し、使用料は無料である（運営規則第5条2）。

Bクラブは施設利用面では恵まれている。学校施設がいっぱいで使用できなくても、B1公民館の体育館は毎日使用できる。冬期間はゲートボール、グラウンドゴルフなども屋内で活動するので、できないのは野球くらいである。

用具については、toto補助金によって既に購入しているの、学校の用具は使用していない。

14. 活動内容

活動は3地区ごとに行っている。

内容は、グラウンドゴルフ（月金土日）、ゲートボール（毎日午後）、ソフトバレーボール（木土の夜）、ウォーキング（月1回土または日）、社交ダンス（火午後）、太鼓（月）、野球（火午後）、卓球（火土夜）、剣道（火土夜）、バレーボールの10種目である。

野球、バレーボール、卓球、剣道はスポーツ少年団を地域の指導者とともに取り込んだ。

太鼓はB3地区で活動しているが、B1地区からの参加者もいる。

2005年の種目別会員数は、グラウンドゴルフ139名、ゲートボール31名、ソフトバレーボール36名、ウォーキング50名、社交ダンス84名、太鼓2名、野球122名（99名）、卓球53名（19名）、剣道25名（15名）、バレーボール28名（15名）で、合計570名（148名）である。なお、（ ）内はスポーツ少年団、中学生数である。

15. 指導者

指導者は種目20名、スポーツ少年団17名の計37名である。

指導者は無償であるが、特に必要と認められた場合は予算の範囲内で謝礼金が支給される（第20条）。

指導者はクラブ内の経験者に依頼することが多い。資格については講習会に行ってもらおうようにしており、中でもソフトバレーボールは審判資格を持つ人も多い。

16. 行事、交流活動

全会員の交流する場として、年1回、クラブフェスティバルを開催している。

初年度はtotoの決定が遅かったことがあり、2001年7月にクラブフェスティバルという合同の交流会を開催した。各種目が同時並行して活動を行い、その後一同に会して交流会を行った。その後、年1回のペースで続けられている。

2004年度は7月25日に開催した。その時も種目ごとに集まって活動したのち、合流して行った。大人だけの交流会にも200～250名ほど参加した。

種目ごとの交流では、グラウンドゴルフは数回、ゲートボールやソフトバレーは月例会を行っている。他にウォーキングやダンスパーティーなどが行われている。

17. 他クラブ、他団体との関係

スポーツ少年団はクラブの活動に取り込んでいる。他のスポーツクラブとの交流は特にない。

18. 地域との関係

クラブが地域に果たす役割としては、地域の交流と連帯意識の形成があげられる。

例えば、現在、議論になっている学校統廃合の問題は、理解してもらうには時間がかかるが、団結力が強くまとまりがよいという地域性を活かし、根気強く説明していくつもりである。

また少子化も進んでいるが、地域で育てるということが大切である。スポーツクラブの活動、大会での交流、子どもの送り迎え等で連帯感が培われているのである。

19. クラブの現状の評価と今後の課題

良いところは次の点である。クラブでは、スポーツ教室を開催するなど、地域のスポーツ文化の普及・振興に貢献している。クラブのことも地域で結構知られている。

クラブから部活動へ野球や剣道の用具を提供した。

2003年にはヤクルトの秦選手を招いて野球教室を開催した。また、モンテディオ山形のサッカー選手を招いて2回くらいサッカー教室を開催した。これは小規模校対象事業でB1小学校で行った。この中からフットサルをやる子どもでできた。

今後の課題は次の点である。totoの補助金がなくなり、財政面が問題となる。クラブハウスの維持管理では、コピー機や電話のリース代も負担となっている。

また、消防団などの地域活動や、この地区で盛んな伝統芸能でも同様であるが、後継者づくりは重要な問題である。

20. 市への要望

とくにあげられなかった。

4. Cクラブ—住民が協議を重ねて創立したみんなでスポーツを楽しむクラブ

1. 設立の経緯

Cクラブは市のモデル事業として、地区での話し合いを重ね2002年に設立した。

酒田市では、近年、少子化や指導者不足に伴って、部活動も合同で活動するなどの状況が出てきた。そこで、生涯スポーツの振興とともに、部活動など子ども達の育成への取り組みが課題となり、2001年度から部活動指導者を地域に求めようとしていた。

Cクラブは、市の行政主導のもとにモデル事業として立ち上げられた。3年間にわたって会議を開き、クラブづくりについて話し合いを重ねた。

クラブを立ち上げる際の話し合いでは、体育指導委員、体育振興会はもちろんのこと、婦人会や自治会の方達など、地域組織のリーダー達からも協力を得た。

発足までには2ヶ月に1度くらいの頻度で会合をもった。クラブをつくるための勉強会では、立ち上げのマニュアルを読んで知識を深めたり、愛知県半田市の成岩クラブのビデオを見るなど、他地域の先行事例などから学習をした。また、秋田県琴丘町には酒田市のスポーツ振興審議会の方とともに視察に行った。しかし設立当初は、切羽詰った状況ではなく、ビデオ等で勉強して、「このようなクラブがあれば」というような思いのもと立ち上げた。

「C」とは、酒田C中学校の教育理念である、「思いやりの心、感謝の心、素直な心、奉仕の心、耐える心、学ぶ心」の6つの心を華に例えた名称で、スポーツクラブもスポーツを通して心身ともに成長を願う意味である。(資料18)

C中学校区(C1, C2, C3小学校区)やD中学校区は、新興住宅地である。C中学校区は世帯数5,400世帯程である。少子化が深刻化する中、C中学区は生徒数が約530名と生徒数

が増加している。生徒数が多いことから部活動の基盤もしっかりとしている。また、C中学校地区にはスポーツ少年団員も120名おり、スポーツ活動が維持されている。さらに体育振興会の愛好会もある。

この実情を受けて、Cクラブを立ち上げる際には、こうした既存の組織団体の活動を各々尊重し、崩さないでクラブ作りに取り組みうということになった。スポーツ少年団、部活動、体育振興会の活動と内容が重ならないように留意しながらクラブづくりに取り組んだのである。そのためCクラブは軽スポーツ主体のクラブとなった。

設立当初は、スポーツ少年団や部活動を崩した形でのクラブづくりを目指したいという思いもあったが、それには住民のニーズの高まりと、十分な話し合いが必要であった。

クラブの特徴は、会員が家族的な雰囲気の中で楽しく活動していることである。C中学校区は3つの小学校区から構成されているため、運営体制の難しさがあるものの、C1小学校区地域を中心に、3学区の体育振興会とC1学区担当体育指導委員・指導員を核として、各種愛好会団体の賛同を得ながら運営している状況である。(資料19)

設立時の2002年は、グラウンドゴルフ、インディアカ、ソフトバレーボール、ソフトテニス、ラージボール卓球の軽スポーツ5種目で活動していたが、2003年度に、酒田市が推進しているウォーキングをはじめ、バドミントンとバウンドテニスの3種目を増やし、現在は8種目で活動している。現在活動している種目は、地域住民のニーズに合ったものと考えられ、今後継続して活動する方針である。

Cクラブは「いつでも、どこでも、だれでも、いつまでも」スポーツに親しむことができる社会の実現と、スポーツを通した元気で楽しいコミュニティづくりを図ることを目指しながら活動を実施している。会員数は、まだ少ない状況であるが、家族的な雰囲気の中でよい汗を流し、心身とも健康増進に効果が発揮されている。(資料19)

2. 設立年月

2002年9月28日設立

3. クラブの目的

Cクラブは、「日常生活の中で自発的にスポーツに楽しみ、各自の健康、体力を維持増進すると共に、会員相互の親睦を図り、地域社会の連帯と明るく、豊かな生活の実現に資することを目的」としている。(資料18)

生涯にわたって誰もがいつでも気軽にスポーツに親しみ、各自の健康・体力を維持増進するとともに、地域のスポーツ環境の基盤づくりと会員相互のコミュニケーションづくりに寄与する。(資料17. 6頁)

4. 会員の資格

「酒田市立C中学校区内の居住者もしくは主旨に賛同される方」から構成される。

また、「18歳未満の個人会員の加入に際しては、保護者の承諾を条件とする。」(資料18)

5. 会員について

(1) 会員数

2002年の会員数は74名である。

2003年の会員数は96名である。

2004年の会員数は121名である。個人会員48名、家族会員28家族(73名)

2005年の会員数は79名である。

家族会員とは、一世帯2名以上加入する場合をいう。

2005年度に会員数が減少した背景には、会費との関わりもあり、グラウンドゴルフ会員が大幅に脱会したことが直接的に関係している。

CクラブのベースはC中学校区である。C中学区は、3つの小学校区（C1小学区100%、C2小学区30%、C3小学区70%）から成っている。こうした学区の条件がクラブ運営にも影響を及ぼしている。会員数においては、C1小学校区の会員数が多い。

実際の活動としては、100名余りの会員で、8種目のプログラムを組んでいるので、平均1種目あたり12～13名の活動となってしまう。やはり活動会員が少ない気がするが、人数が少ない分だけ家族的な雰囲気があり、楽しみながら長続きするというメリットもある。

現組織を崩さず、一般募集のみで会員を増やしていく場合、2008年度までの目標会員数は200名とする。

(2) 性別

ソフトバレーボールは、特に女性の参加者が多い。

(3) 年齢

年齢は、小学生から80歳代までと幅広い。平成17年の年齢別構成は以下の通りである。

6～8歳	2名（1.7%）
9～11歳	7名（5.8%）
12～14歳	9名（7.4%）
15～17歳	3名（2.5%）
18～19歳	2名（1.7%）
20～64歳	73名（60.3%）
65歳以上	25名（20.7%）

計121名となっている。

一般的に、1人1種目の参加者が多く、複数種目への参加者は固定化している。各種目別の活動状況は以下の通りである。（資料19）

- ・グラウンドゴルフ…40歳以上の参加者が多く、高齢化傾向にあるが、プレーが容易であるため、年々会員が増加している。
- ・インディアカ…20歳代から50歳代前半までの参加者で、意外とプレーが難しいため、参加者が固定している。
- ・ソフトバレーボール…小学生から高齢者までと、幅広い年齢で構成されている。
- ・ラージボール卓球…中学生から高齢者までと、幅広い年齢で構成され、年々参加者が増加している。
- ・ウォーキング…中、高齢者が多く、年々参加者が増加している。中には、若い女性も参加している。
- ・ソフトテニス…小学生から高齢者までと幅広い年齢で構成され、年々参加者が増加している。
- ・バウンドテニス…中学生から高齢者までと幅広い年齢で構成され、年々参加者が増加している。
- ・バドミントン…小学生から高齢者までと、幅広い年齢で構成され、年々参加者が増加している。

(4) 職業構成

不明。主婦、退職者の高齢者も多い。

6. 入会募集と広報

会員募集は、チラシを作成して行っている。体育振興会の協力を得て全戸に配布している。

申し込み方法は、申し込み書を、居住している学区の体育振興会事務局または、各自治会の体育振興会代表理事まで提出する。

3月中旬から3月末までの期間は、無料体験が設定されている。自由に見学や参加してもらう期間を設け、どのような活動をしているか、一度体験をしてからの申し込みも可能である。全体的には個人で入会してくる人が目立つ。

クラブでは、ホームページを開設していないため、PR用のチラシや、会報だより等を発行し、PR活動を強化していきたいとしている。

7. 入会目的、きっかけ

入会の目的は、運動不足、ストレス解消、ダイエットのためなどである。

活動を楽しみにしている会員も多い。

8. 参加率・継続率

各種目の活動状況は以下の通りである。(資料19)

- ・グラウンドゴルフ…1回あたり20名参加
- ・インディアカ…1回あたり12名参加
- ・ソフトバレーボール…1回あたり12名参加
- ・ラージボール卓球…1回あたり16名参加
- ・ウォーキング…1回あたり15名参加
- ・ソフトテニス…1回あたり15名参加
- ・バウンドテニス…1回あたり15名参加
- ・バドミントン…不明

女性会員は、家族の世話や家事などがあるので、参加は少し遅くなる傾向がある。

9. 会費

会員からは年会費、保険料(1,500円)を徴収する。入会金は、一律500円である。(資料17. 第2条)

年会費は、前期(4月～3月)からの加入者は個人会員3,000円、家族会員5,000円である。後期(10月～3月)からの加入者は個人会員1,500円、家族会員2,500円である。

保険料について、家族会員は、登録する方すべてから保険料を徴収することを原則とする。

会費は、事務用品、備品の購入、交流大会費等に対し支出される。

10. 財政

totoの補助金は、設立の2002年は1,243,000円(依存率/72.0%)、2003年は1,188,000円(依存率/68.4%)であった。

totoは3年目でつかなくなり、事務経費や財政的には厳しい面もある。totoはコピー機などの事務用品のために当てにしていたので、残念である。市の助成金は今のところ期待できない。今後可能なことは、体育施設使用料の減免の便宜くらいであろうと予測している。しかしながら、現在の会費で運営はできる。

また、受益者負担の意識が希薄な傾向もあって、会費では備品等の購入はしないようにしている。

11. 組織運営体制

Cクラブは、3つの小学校区地域で構成され、3地区体育振興会長、事務局長が役員を任務している。C1学区事務局員が総括である。

組織運営体制については、会長、副会長、理事、事務局、事務局次長、会計、監査委員で構成される。(資料19)

クラブとしては、現在の自治会組織を活用して、各自治会からクラブ推進員を選出し、自治会と一体になり魅力あるクラブを作り上げていきたいとしている。(資料19)

12. クラブハウス、事務所

酒田市立C中学校体育館ミーティングルーム

運営の中心は事務局で、Cクラブ事務局長のY氏が担当しているが、日常の活動は種目ごとに運営されている。

13. 拠点施設、用具

施設は、学校開放の制度を活用している。学校は、第一に部活動優先であるが、次にクラブへの対応をさせていただいている。

活動拠点は、酒田市立C中学校体育館・グラウンド・テニスコート、C1小学校、C2小学校、C3小学校体育館・グラウンド、日の出公園、市営体育施設である。

酒田市では学校施設開放の使用料は無料が原則である。このため、施設利用にお金を支払うという意識は低い。

屋外種目については、冬季間に酒田市体育施設を利用した場合、無料とする。その他、酒田市体育施設を利用した場合は1名につき、300円を負担する。(資料17. 8頁)

各種目の活動場所は以下の通りである。

- ・C中学校体育館…ラージボール卓球、バウンドテニス、グラウンドゴルフ(冬季間)、ソフトテニス、ウォーキング(集合場所)
- ・C中学校テニスコート…ソフトテニス
- ・C1小学校…ソフトバレーボール、インディアカ、バドミントン
- ・日の出公園、酒田市体育施設等…グラウンドゴルフ

14. 活動内容

8種目の種目設定となっているが、1種目のみの参加はもちろんのこと、8種目どの種目にも全て参加することができる。ただし、申し込みに際して、主に活動を希望する種目を登録するものとする。(資料18)

活動は、活動種目ごと概ね隔週の開催となっており、8種目が第1, 3, 第2, 4と各月2回の実施となっている。土日、平日夜間を中心に活動が続けられている。しかしながら、実際活動をしてみて、頻度としては週1回では物足りず、2回程度がよいのではないかと考えている。

内容は、グラウンドゴルフ(土日曜)、ラージボール卓球(火曜)、ソフトバレーボール(第1, 3金曜)、インディアカ(第2, 4金曜)、ソフトテニス(土曜)、バドミントン(水曜)、ウォーキング(土曜)、バウンドテニス(土曜)である。

ウォーキングは、酒田市内のコースを基本に庄内管内の名所巡りなどが企画される。ウォーキング後に到着地点で昼食を摂るなど楽しみながら活動が続けられている。

ソフトテニスやバウンドテニス、バドミントンは、未経験者が多く、基礎練習を主に活動している。

15. 指導者

現在は地区内に指導者を依頼している。指導者は、各愛好会の指導者や、教職員、部活動のコーチおよび各種目の審判員資格取得者が担当している。

Cクラブには28名の指導者がいる。

種目別にはグラウンドゴルフ3名、ラージボール卓球4名、ソフトバレーボール6名、インディアカ6名、ソフトテニス3名、バウンドテニス2名、バドミントン1名、ウォーキング3名である。(資料17. 2005年度指導者名簿)

会員は年齢や技術レベルに幅があるので、指導者には初心者と上級者にも対応できる二面性が必要とされる。

会員数増加は理想だが、実際に増加した場合、指導者数や技術指導の質が伴わず、人員確保の負担が生じるおそれもある。また、各々のレベルに合った指導も必要となってくるので、必ずしもよい面ばかりではなく、ニーズに合った対応が必要である。

指導員に対する謝礼金は、会員の年会費から、クラブの財政状態を勘案して適宜支払われる。(資料17. 第5条) 謝礼金は設立当初は支払うようにしていたが、現在は支払われていない。

また、体育館の鍵の管理など、指導者の協力がないと成り立たない面もある。

クラブマネージャーは、2003年度までに資格取得者がいないため、Y氏が担当していた。しかし、「平成16年度総合型地域スポーツクラブマネージャーセミナー」に2名受講したため、2005年度に2名が資格を取得する予定である。(資料19)

16. 行事、交流活動

2002, 2003年度にグラウンドゴルフとラージボール卓球大会を開催し、会員の交流と親睦を図り、有意義な活動も行っている。ラージボール卓球大会ダブルスは年2回開催されている。(資料19)

総会を別にすると、全会員が集う機会はなく、種目ごとに大会後の反省会などで交流している。

17. 他クラブ、他団体との関係

他団体や地域との交流活動も設けられている。2004年に中学生女子を対象に、グラウンドゴルフ講習会と大会を行い、若年層の会員増を目指している。

C1小学校の体育振興会主催のソフトバレーボール大会には、自治会ごとの練習を手伝ったり、大会運営に協力をした。

金曜日夜間に活動されていたソフトバレーボールには、Bクラブの会員の方も参加されているなど、交流もみられる。

18. 地域との関係

地域に果たす役割としては、家族的な人間関係を築くことなどが挙げられる。

19. クラブの現状の評価と今後の課題

良いところは次の点である。技術力向上を目指す、あくまでも、楽しくプレーし、健康増進を目指す。活動によっては、ストレス解消・健康増進の効果が現れている。

8種目全てが、家族的な雰囲気楽しくプレーをしている。種目によっては、子どもから高齢者までプレーを楽しんでいる。

単一競技種目しかできない会員も多かったが、複数種目に入ろうという意識も高まり、さらなるスポーツライフの可能性を見出すきっかけともなっている。

クラブを立ち上げた意義はあったと考えられる。今後は、現在活動している軽スポーツを継続維持し、競技スポーツではなく、健康増進とストレスの解消並びに会員相互の交流を図るため活動を展開していく方針である。(資料19)

今後の課題は次の点である。コミュニティ振興会の愛好会等を、Cクラブに加入するよう要

請したい。現在、クラブには既存の愛好会等の団体が加入していない。3小学校区それぞれに愛好会組織があり、10名前後で独自に活動している。実質、体育館を10名程度で独占しており、これは有効活用した状況ではないと考える。こうした状況から、近い将来各愛好会等の団体をクラブに巻き込み、運営することを目指したいとしている。(資料19)

そして今後は、各自治会をはじめ各コミュニティ振興会の組織(熟年部、女性部、子供会育成部等)も巻き込みながら、運営体制の強化を図っていききたいとしている。(資料19)

PR不足のためか、Cクラブの理解度が低い。2004年には、中学生女子を対象に、グラウンドゴルフ講習会と大会開催したが、今後は会員向けの大会のみならず、会員以外の交流大会も企画し、クラブの活動をPRし、会員の増加に努めていきたい。(資料19)

指導員(有資格者)の確保が困難で、レベルに合った指導が難しい。指導員資格を取得している人材が不足しているため、指導員の技術力、指導職力を養うためにも、各種研修会や講習会に積極的に参加し、指導員を確保することが、最大の課題である。特に、安全管理の面に関しては、傷害保険の加入のみで、救急処置法の対策がとれていない。(資料19)

要望する曜日時間が使用できないなど、活動場所の確保が不十分である。

総合型地域スポーツクラブは、子どもから大人まで年齢に制限を設けず活動するのが理想ではあるが、部活動への対応は問題になる。

Cクラブの活動に取り組んでみて、運動頻度は週1回では物足りず、週2回程度が適度ではないかと思う。そうすると、複数種目に取り組むこととなる。クラブとしても、会員が複数種目を楽しむことがよいのではないかと考えている。

受益者負担といっても、その意識は希薄で、会費が高いとすぐ批判が出てしまう。設立当初より会費は議論になってきた。いくらに設定するか、また会員からは使用用途は何かといった疑問の声も上がった。

会費は、将来的見通しを含めて高めに設定してあるが、グラウンドゴルフは高齢者が多いこともあって、単独種目にしか取り組まない会員も多く、会費の設定は課題として残る。そこからは会費をその分、安くしてほしいとの声もある。

各種目によって用具(消耗品)購入が異なるため、アンバランスが生じる。そのため、種目によっては、会費の他に負担金を徴収することも視野に入れながら検討する必要がある。(資料19)

またプログラムも拡大していきたいとしている。例えば、ウォーキングを発展させ、児童から高齢者を対象にした野鳥・植物・星の観察会や、里山歩きなど、自然教室や自然体験を兼ねた企画も取り入れるように努めていきたい。

スポーツと音楽を組み合わせた、創作ダンス、舞踊などの企画を計画する。例えば、酒田祭りに合わせ、獅子踊り、和太鼓、創作ダンスを実技し、運動と文化を融合する取り組みを行う。

クラブ主催の大イベントを開催していないため、地域住民が気軽に参加できる軽スポーツ大会や講演会を開催し、健康づくりの重要性等のPRを行うとともに、地域住民の運動体力テストを毎年実施し、その結果を基に、長期展望に立ち体力づくりのプログラム等を作成しながら、楽しく気軽に運動できる企画を計画するよう努力する。

また2年に1回、地域住民にスポーツに関する意向調査を行い、各年齢層の要望に応えるようクラブに反映していきたい。(資料19)

20. 市への要望

不明

5. Dクラブ—コミュニティ振興会の活動から立ち上げたクラブ

1. 設立の経緯

Dクラブ設立のそもそものきっかけは、「健康さかた21計画」のモデル地区指定を受けたDコミュニティ振興会の取り組みに端を発する。

山形県では、2000年に「健康文化やまがた21計画」を策定した。それを受けて酒田市では「健康さかた21計画」を2002年からの10年計画で取り組むこととなった。

「健康さかた21計画」とは、生活の質的豊かさを向上させながら、健康寿命の延伸と、壮年期死亡を減少させることなどを目標に、市民の健康づくりを総合的に推進する計画である。主な3つの目標としては、①食生活の改善による健康保持、②休養やこころの健康によってストレス解消、③身体運動による健康増進などが挙げられる。(資料15. 7頁) 上記以外には、禁煙、歯の健康などがある。

2002年にこの地区が手を挙げ、モデル事業として市から予算をもらいながら、取り組み、実践しようということになった。Dコミュニティ振興会は酒田市で早い時期に設立した団体である。(資料16)

その際に、上記目標の①、②については既にDコミュニティ振興会には活動の種があった。③の身体運動については、下地として、16あるカルチャー教室のうち健康体操という活動実態があったためである。「健康さかた21計画」のモデル事業の指定を受けたが、補助金は出にくかった。

「健康さかた21計画」の3つの主要事業のうち、③身体運動の部分を検討している頃、酒田市教育委員会体育課から「総合型地域スポーツクラブ事業」の話を受けた。検討の末、身体運動については、体育課が推進している「総合型地域スポーツクラブ事業」とドッキングさせることで健康課、体育課、Dコミュニティ振興会が合意した。(資料13. 2頁)

そこで、半年足らずで規約を策定し、クラブを立ち上げることとなった。2003年1月に活動種目のヒアリングを実施し、種目を決定した。

2003年3月にクラブは設立した。設立年度は、既に活動をしていた健康体操のほか新規に9種目を加え10種目でのスタートとなった。

クラブの特徴としては、単一のスポーツ種目だけでなく、複数の種目が用意されていること、障害者を含み子どもから高齢者まで、また初心者から一定レベルの競技者まで各々のレベルに応じて活動できることなどが挙げられる。(資料13. 2頁)

しかし、2年間の活動の後、2005年に「総合型地域スポーツクラブ事業」から脱退した。モデル事業としての指定を解除し、2005年以降から事業主体をDコミュニティ振興会の直轄事業として引き継いでいくことにしたのである。

設立からの2年間は「総合型地域スポーツクラブ事業」から補助金を受けて活動してきたが、事務局体制の変化や、助成金の減額などの事情が重なったため、その枠組みから脱退することになった。

この脱退の背景には2つの事情があった。

1つ目はtoto補助金に関わる財政面と事務量の問題である。補助金は5年間受けられると思っていたが、年々減少し、2005年も減るだろうといわれていた。他方で、補助金を受けるに伴う事務作業は煩瑣で、研修会参加等の対外活動や付き合いも負担であった。2005年からクラブの活動をコミュニティ振興会の活動として取り組むことにしたが、行政との関わりがこの

時点でなくなり、事務量が減少した。これによって人件費の削減にもつながった。

2つ目は人に関わる問題である。特に事務局長のS氏が亡くなられたことが大きい。DクラブでS氏は大変重要な人物であった。

こうした事情を考慮すると、totoを辞退し、コミュニティ振興会の活動に組み込んだ方がよいと考えられた。

しかし、これまで活動を続けてきたクラブを解散するのはもったいないので、市と話し合い、自主運営によって実質的に活動を継続することにした。toto補助金はいずれなくなることを考えると、クラブ活動のコミュニティ振興会活動への移行は、toto終了後の対応時期を早めたということもできる。

高齢者の健康づくりは社会的にも行政的にも大きな課題である。総合型地域スポーツクラブの事業から脱退はしたが、従来から進めていた事業の充実と、健康・体力づくりとして、Dクラブの活動は、地域住民のニーズに応えたものであると考えている。

コミュニティ振興会の役割は地域振興であり、安全安心の街づくり、福祉の街づくり、青少年育成などがある。それに加え、生涯学習の活動にも取り組んでおり、Dコミュニティ振興会では現在15のカルチャー教室と、Dクラブの11スポーツコースの計26活動を直営で運営している。これは酒田市の中でも数が多く、活発な活動を行っていることを示すが、その中でスポーツコースの活動は重要な位置を占めている。

2. 設立年月

2003年3月15日設立

3. クラブの目的

Dクラブは、「日常生活の中で自発的にスポーツを楽しみ、各自の健康、体力を維持増進するとともに、会員相互の親睦を図り、地域社会の連携と明るく豊かな生活の実現に資することを目的」としている。(資料13. 第3条)

生涯にわたって、誰もが気軽にスポーツに親しみ、各自の健康・体力を維持増進するとともに、地域スポーツの環境基盤づくりと会員相互のコミュニケーションづくりに寄与する。(資料13. 12頁)

4. 会員の資格

「原則としてD中学校区内の居住者もしくは主旨に賛同した」人から構成される。(第5条)

18歳未満の入会手続きは、保護者の申し込みもしくは保護者の承諾が条件である。

5. 会員について

(1) 会員数

2003年の会員数は404名である。男性191名(47.3%)、女性213名(52.7%)

2004年の会員数は500名である。

2005年の会員数は450名である。

(2) 性別

男女比は半々くらいであるが、女性の方が少し多い。(2003年度)

グラウンドゴルフは女性が7割くらいと多い。バウンドテニスは女性が多い。

(3) 年齢

年齢層は種目ごとに特徴がある。

会員の50～60%は65歳以上の高齢者である。特にウォーキングやグラウンドゴルフに参

加している。

30歳～50歳代の壮年層は100名弱くらいおり、社交ダンス、健康体操など夜の活動が中心である。剣道やエアロビクスには小・中学生がいる。

(4) 職業構成

不明。主婦、退職者など高齢者は多い。

6. 入会募集と広報

会員募集や広報は、コミュニティ振興会の組織を活用して全戸配布で行っている。

会員の募集は印刷物で地区5,200世帯にコミュニティ振興会の組織を活用して配布する。

3回発行するコミュニティ振興会の会報にスポーツクラブに関する記事を入れていた。

2月～3月中旬頃に募集のチラシを全戸に配布している。そして4月から年間を通して活動が続けられている。

団体が活動するためには、人、物、金、情報が欠かせない条件であると考えられる。

7. 入会目的、きっかけ

クラブに入会する目的は、健康づくりと生きがいづくりである。

高齢者も家に閉じこもっていないで、外に出て多くの人と交流、交際することでメリハリある生活を送ることができる。

8. 参加率・継続率

会員は熱心で活動への参加率は高い。社交ダンスでは9割くらいの参加率がある。

2、3種目の活動を行っている会員もいるが、種目が違うと会う機会はほとんどない。

9. 会費

会費は謝礼金を支払う3種目を除き、年会費(1,500円)を徴収する。

設立当初は年会費1,000円であったが、2005年度のコミュニティ振興会活動への移行に伴い、会費を50%値上げした。

講師謝礼金を支払うエアロビクスと健康体操は、年会費に加え種目別会費3,000円、社交ダンスは6,000円とした。

スポーツ保険の加入は、原則として行われていない。成人の場合、加入する種目での危険度を考慮し各自で選択となっている。(資料14)

10. 財政

totoの補助金は、2003年は2,091,000円(依存率/66.3%)であった。

クラブは2004年度をもってtotoを辞退し、活動を100%そのままDコミュニティ振興会で行うことにした。

2005年度の会費値上げによって会費収入は40万円ほどに増加した。

会場使用料は、原則としてDクラブの負担となっている。しかし、活動期日以外の練習や暖房費は各種目ごとの負担となる。(資料13.第5条)

11. 組織運営体制

組織運営はコミュニティ振興会の関係者が中心である。33地区ある自治会会長、2地区の体育振興会、老人クラブ、婦人会等の中心的人物で構成されている。

Dクラブには、会長1名、副会長3名以内、理事20名以内、監事3名以内、事務局長1名の役員が置かれている。(第8条)D1、D2、D3体育振興会会長には副会長に就いてもらうなど、体育振興会からの協力も得ている。

また、顧問も置くことができる。顧問は会長が推挙し、理事会の同意を得るものとする。

「総代会」は毎年1回以上開催する。代議員は、D1・D2・D3小学校区ごとに、会員の
中から各15名を「総代会」開催の都度、選出される。(運営規則第8条)

「理事会」は会長、副会長、理事、事務局長で構成され、毎年2回以上開催される。(第16条)
運営を円滑に執行するため、必要に応じて「運営委員会」を置くことができる。(第20条、運
営委員会は、専門部会と種目別クラブ代表者で組織される。(運営規則第7条)

運営の中心は事務局であるが、日頃の活動は各種目ごとに、種目別運営委員を中心に行われ
ている。

12. クラブハウス、事務所

D1小学校体育館内ミーティングルーム

学校開放として利用されており、指導者の打ち合わせや、スケジュールづくり、会員への連
絡や通知、会計、利用者のミーティング等に利用されている。

事務所は、酒田市Dコミュニティ振興会内に置かれている。

13. 拠点施設、用具

活動拠点は、D1、D2、D3小学校、D中学校体育館、亀ヶ崎記念体育館、勤労者体育セ
ンター、亀ヶ崎公園ソフトボール場、市営体育施設などである。(資料13)

この地区は体育施設が少ないので、市教育委員会に相談して、優先利用の便宜を図ってもら
うようにした。しかし、学校体育館は現在、Dクラブが独占しているような状態である。

種目別ごとの活動施設は以下の通りである。

- ・D1小学校体育館：ソフトバレーボール、バレーボール、バウンドテニス、卓球（毎週月曜
日）、剣道、フットサル
- ・D2小学校：卓球（毎週木曜日）
- ・Dコミュニティ防災センター：エアロビクス、ウォーキング（集合場所、コース設定別）
社交ダンス（冬季1月～3月）
- ・亀ヶ崎公園ソフトボール場：グラウンドゴルフ
- ・亀ヶ崎記念体育館：社交ダンス、健康体操

用具や、卓球・バレーボールネット等の備品は、初年度にtoto補助金で購入しているの
で、当面は購入しなくてもよい。新しくクラブ種目となったフットサルにはゴールを購入した。

14. 活動内容

2005年は11種目の活動が行われている。

内容は、グラウンドゴルフ（月～土午前）、卓球（月木夜）、ソフトバレーボール（上級者：
金夜、初心者：土夜）、バレーボール（火土夜）、フットサル（火夜）、剣道（水夜）、バウンド
テニス（木夜）、ウォーキング（4月～11月8つのコース設定）、エアロビクス（第2、4水夜
／ジュニア17:00～18:30、大人19:00～20:30）、健康体操（第1、3金午前）、社交ダンス（木
夜）である。

15. 指導者

エアロビクス、健康体操、社交ダンスには講師が各1名ずついる。

指導者は無償であるが、特に必要と認められた場合は予算の範囲内で謝礼金が支給される。(資
料13、第21条)

エアロビクス、健康体操、社交ダンスには毎週講師謝礼金が支払われている。

16. 行事、交流活動

グラウンドゴルフは月～土曜日の活動に加え、月例会を亀ヶ崎公園ソフトボール場で行っている。また年2回、最上川河川敷のスワングラウンドゴルフ場で競技会が開催される。これはDコミュニティ振興会の福祉部との共催で、2004年度は183名の参加があった。

社交ダンスは、社交ダンス交流クリスマス大会があるほか、各種目に交流大会（反省会）がある。

17. 他クラブ、他団体との関係

クラブの活動はスポーツ少年団や学校部活動との連携は行っていない。しかし、剣道などでは部活動とクラブに入会している生徒もいるようである。

ソフトボール、野球等の種目では対外試合は行っていない。

18. 地域との関係

クラブの活動は、健康づくりにもなり、スポーツを通して地域を元気で生き生きしたものに行っている。Dクラブの活動は地域振興の点でも欠くことのできない重要なものであると考えている。

また、地域コミュニティにとってクラブが果たしている役割として考えられることは、クラブが存在しなかったら、物足りなく寂しいだろうということである。スポーツに取り組む姿は生き生きとしており、さらに多くの方が活動に参加してほしい。

また、クラブ活動を盛んに行うことによって、施設の有効活用にもつながっている。

19. クラブの現状の評価と今後の課題

良いところは次の点である。500名を数えるクラブ会員の活動と「健康さかた21計画」事業への取り組みによって住民の健康づくりと、コミュニティ振興会本来の役割である社会教育事業の推進と地域振興に貢献してきた。（資料15. 2頁）

Dコミュニティ振興会には、直営の様々な活動があるが、健康づくり、福祉、安心安全など、地域住民のニーズに応える必要がある。そして生きがいづくりにも貢献する。そうした意味からもDクラブの活動は継続していかなければならないし、大きな活動の1つとして位置づけられる。2005年度にコミュニティ振興会の活動としてDクラブの内容を継承した。この活動には住民のニーズがあり、さらに充実、発展させていくべき事業である。

Dクラブの設立のきっかけはtotoによる事情も大きいですが、活動はよい結果をもたらしている。totoが終了したり、「健康さかた21計画」の事業が終わった時点で辞めて、実体がなくなってしまうのではそれまでの成果が無意味となってしまう。その点でもDクラブは、住民のニーズに合致し、なくてはならない活動と評価できる。

クラブの評価として運営は円滑に進んでいると考えられる。

今後の課題は次の点である。今後、新しい種目や活動が出てくる可能性はある。夜間に活動している卓球も、クラブに話し合いのうえで加入となった。2005年から新しくクラブ種目となったフットサルも施設確保の困難さから、Dクラブに参加することになった。今後、新しくできた場合でも、まだ1種目くらいは体育館で活動できる余地がある。このように、Dクラブ加入以前に種子があるクラブや、少人数で活動しているクラブの加入にも前向きに取り組んでいきたい。

酒田市では、特に市の南側全体でスポーツ施設が不足している。Dクラブでは、施設利用を安定化させたかったので、酒田市教育委員会と話し合って優先的に利用できるようにしたもの

の、それでも活動施設が不足している状態である。

若い世代の取り込みは課題である。D中学校区には20～50歳代の若い世代も多いが、地域活動やコミュニティ活動への参加意識は希薄である。

20. 市への要望

財政的援助はお願いしたいが、運営は独自に取り組ませてほしい。

酒田市では北側にスポーツ施設が多く、D中学校区をはじめ市の南側全体にスポーツ施設が不足している。中学生の部活動なども遅くまで活動していて、現在ある施設では対応しきれていない状態である。こうした状況から、市に対してスポーツ施設の要求を出している。

6. Eクラブ—体育協会が市内全域を対象にジュニア4種目でスタート

1. 設立の経緯

Eクラブは、酒田市からの話を受けて、酒田市体育協会内での議論から4種目がクラブ立ち上げに参加し、2002年に設立した。

酒田市体育協会は33の種目別競技団体と、中体連、高体連など3団体の計36団体から成り立っている。クラブ立ち上げについては、まず教育委員会の方から話があった。

Eクラブは現在4種目での活動がなされているが、設立する際に、酒田市体育協会内での議論などから、野球、テニス、バスケットボール、陸上の4種目に絞られた。当初は柔道も話があったが、最終的に辞退され加入にいたらなかった。その結果、ジュニアの原石から育てていこうという考えのもと4種目でのスタートとなった。

クラブに参加した4種目については、それぞれ固有の実績と事情があった。なぜこの4種目になったかということ、それぞれに次のような事情があった。

陸上競技については、酒田市陸上競技協会（以下、SRKと記す）が運営するSRKジュニアクラブ（1996年4月設立）の活動実績をもっていた。（資料12）さらにSRKジュニアクラブには前身の活動があった。酒田市では20年間ほど、夏休み中の1週間陸上教室を開催していた。これには約100名以上の参加があった。こうした活動を受けて、底辺拡大を目的とした小学生の活動中心のSRKジュニアクラブが発足した。

野球については、リトルリーグがないので中学生に硬式野球を握らせようということが目的だった。中学校教諭MO氏が「酒田ハーバーベースボールクラブ」というジュニアクラブを指導し、高校につながるようとしている。酒田ハーバーベースボールクラブには前身の活動があった。「硬式野球練習会（2002年発足）」として活動してきた会の活動が、Eクラブに所属することに伴い、酒田ハーバーベースボールクラブとしてクラブ組織に移行となったのである。ここには体育協会からの補助金が出ている。

テニスのように学校体育では行われていないものも、すでに経費の負担をしながら活動している実態があった。

バスケットボールについては、酒田市は熱心で盛んな地域である。小学生のためのスポーツ教室があったがこれを拡大した。

またクラブ立ち上げの背景には学校週5日制や指導者不足などの学校部活動をめぐる状況の変化も深く関わっている。

まず、完全学校週五日制にもなって、土・日曜日については部活動日数、活動時間が減少した。土曜日については部活動を続けているところもあるが、全体的には狭められているのが

現状である。こうした土・日曜日の子どもの活動の受け皿としての役割が1つ挙げられる。

次に、学校だけでは指導者が不足していることが挙げられる。ほとんどの種目において専門家がおらず、指導やレフリーを行っているのは自営業の方が多いのである。

このように、児童・生徒数と学校教員の減少ともなって、スポーツ指導には地域の指導者の協力が必要になってきていた。こうした事情のもと、市からの呼びかけに応じて、酒田市体育協会では、すでに実績をもっていた陸上・野球・テニス・バスケットボールの4競技でEクラブを設立した。

2. 設立年月

2002年12月26日設立

3. クラブの目的

Eクラブは、「小、中、高校生などがスポーツ活動の環境とプログラムを共有し、その活動を通じて一貫指導体制による競技力の向上のほか、スポーツを通じて健全で心豊かに生まれ、もって生涯にわたって幅広くスポーツライフを楽しめるよう会員相互の親睦に努め、明るく健康的な生活をサポートすることを目的」としている。(資料10. 第3条)

4. 会員の資格

Eクラブは3種類の会員から構成される。「会員は正会員、活動会員及び協賛会員とする。」(資料10. 第5条)

1) 正会員：①クラブの目的に賛同して入会した、クラブの運営に協力し参画する個人及び団体

②指導者、指導経験者、専門技術・専門知識取得者及びクラブの主旨、目的に賛同し指導者登録があった個人

2) 活動会員：酒田市体育協会の加盟団体が主催する「スポーツクラブ対象事業」に応募した生徒並びにその保護者

3) 協賛会員：クラブに賛同し事業を賛助するために入会した、個人又は任意の団体もしくは法人

5. 会員について

(1) 会員数

2002年の会員数は330名である。男性178名(53.9%) 女性152名(46.1%)

2003年の会員数は300名である。男性185名(61.6%) 女性115名(38.3%)

2004年の会員数は344名である。男性178名(51.7%) 女性166名(48.3%)

2005年の会員数は378名である。

会員は小、中学生がほとんどでSRKジュニアクラブに若干名高校生がいる。

(2) 性別

男女比は半々くらいである。

(3) 年齢

2005年の会員数378名のうち小学生116名(30.7%)、中学生262名(69.3%)である。

(資料25. 9頁 2005年度調査)

活動会員を種目別にみると以下の通りである。

- ・SRKジュニアクラブ(陸上競技)…小、中、高校生
- ・野球教室…小学生、中学3年生

・酒田ジュニアテニスクラブ…小、中、高校生

・中学生バスケットボール教室…中学生

(4) 職業構成

小学生、中学生中心。

6. 入会募集と広報

入会募集は申し込み用紙を配布して行っている。各種目で各学校長宛てに案内を出すケースが多い。野球においては部活動顧問を通じて生徒に話すケースが多い。

子ども達は学校でクラブのことを聞いて入会するケースが多いが、保護者の理解と協力も必要である。小学生は近ければ歩いてくる他は、保護者が車で送り迎えをしている。中学生は近ければ自転車で来るが、遠い生徒は車で送り迎えをしてもらっている。

7. 入会目的、きっかけ

子どもがやりたいからと言って保護者から問い合わせがくることが多い。保護者の口コミや、兄弟が活動しているからと言って入会する子どももいる。

S R Kジュニアクラブにおいては、チャンピオンを目指すという目的だけではなく、運動が苦手だからと言って入会してくる子どももおり、スポーツ普及の一面も垣間見せる。

8. 参加率・継続率

参加率、継続率はともに高い水準である。

9. 会費

会員からは年会費（2,000円）、保険料（500円）を徴収する。

種目に関係なく年会費は2,000円である。

学校体育の事情が引きずっていることだが、スポーツに対してお金を出すという意識があまりないように見受けられる。しかしながら中にはお金がかかってもよいから毎日でも活動をやってくれと言う熱心な親もいる。

10. 財政

財政面ではクラブ会員の会費だけで運営するのは厳しいのが現状である。

totoの補助金は、設立の2002年は1,168,000円(依存率/79.2%)、2003年は1,051,000円(依存率/63.6%)であった。2004年は800,000円(依存率/51.8%)であった。

totoは当初5年間の補助があるものと考えていた。しかし2005年からなくなり2005年度は酒田市体育協会から助成金60万円を出した。今後種目を増やしていくことになれば、補助を酒田市体育協会から出すことも検討するだろうと考えられている。

経費面でtotoの補助金がある時はよかったが、2005年からつかなくなったこともあってS R Kから強化費としてS R Kジュニアクラブに年間20万円を出すこともある。

施設使用料は年間平均の実績に応じて支払っている。

11. 組織運営体制

「運営委員」は23名以内とし「Eクラブ運営委員会」を組織する。運営委員のうち1名を会長、1名を副会長とする。監事は2名である。

「幹事」は14名以内とし「Eクラブ幹事会」を組織する。(資料10. 第11条)

Eクラブは総会、運営委員会、幹事会を組織・構成する。

「通常総会」は、正会員をもって構成され毎年1回開催する。(第18条)

「運営委員会」は、運営委員をもって構成され毎年2回以上開催する。(第20条)

「幹事会は」、会長が特に必要と認めた時に開催する。(第21条)

体育協会内事務局が組織運営の中心であるが、日常の活動等は種目ごとに行われている。総会を別にすれば合同して行う事業は特になく、クラブへの問い合わせも事務局よりも各種目別に行われるケースが多い。

12. クラブハウス、事務所

クラブハウス専用施設はない。4種目がそれぞれの活動拠点施設で種目ごとに活動している。事務局は酒田市体育協会内(酒田市営屋内プール)に設置されている。(資料10. 第15条)

指導者の打ち合わせやスケジュールづくり、会員への連絡通知、会計等に利用されている。

13. 拠点施設、用具

活動拠点は以下のように種目ごとに異なっており、それぞれが独自に活動を続けている。(資料11. 7頁)

- ・SRKジュニアクラブ：酒田市営光ヶ丘陸上競技場
- ・野球教室：酒田市営光ヶ丘野球場、屋内練習場、酒田市内高等学校野球場、屋内練習場
- ・酒田ジュニアテニスクラブ：酒田市営光ヶ丘テニスコート、酒田市国体記念テニスコート・体育館
- ・中学生バスケットボール教室：酒田市立D中学校体育館、酒田市国体記念体育館

14. 活動内容

活動は種目ごとに年24回の活動を行っている。基本的な技術の習得(練習)と各種目の交流会である。

内容は、SRKジュニアクラブ(第1, 3, 5土午前/小学生は第1, 3土曜のみ)、野球教室(土日日夜)、酒田ジュニアテニスクラブ、中学生バスケットボール教室(月夜)の4種目である。

2005年度の種目別会員数は陸上競技90名、野球90名、テニス60名、バスケットボール90名である。(資料11)

15. 指導者

Eクラブには42名の指導者がいる。

種目別では、SRKジュニアクラブ11名、野球教室17名、酒田ジュニアテニスクラブ7名、中学生バスケットボール教室7名である。(資料11. 7頁)

特に陸上競技では種目数が多く、指導者不足になっているため養成に力をいれたいとしている。

16. 行事、交流活動

4種目が種目ごとに基本的な技術の習得を目的に活動するのが基本で、特に統一した活動は行っていない。

17. 他クラブ、他団体との関係

各種目別大会への参加がされている。

SRKジュニアクラブ設立当初は、学校側では大会参加の登録問題などから、クラブ活動への理解を得るのに苦労した。しかし現在では理解されるようになった。

18. 地域との関係

スポーツ少年団にない種目に取り組むことで、子ども達の要望に応えることができる。また、少年期からの活動経験で中学以降の競技人口の底辺拡大の役割を担っていると考えている。実

際に、野球や陸上では中学や高校に入って活躍している生徒たちがいる。

19. クラブの現状の評価と今後の課題

良いところは次の点である。酒田市スポーツ振興計画に掲げられている目標テーマ「いつでも、どこでも、だれでも」スポーツに親しめる環境づくりと「ひとり‘1’スポーツ」の推進に寄与していると考えられる。

特に、少年期からスポーツに親しみ、将来に向けた酒田市の競技力向上のための一貫指導体制づくりの第一歩を踏み出し確立しつつある。クラブ活動を通して、スポーツを行うことの喜び、感動を子ども達に与えることができ、スポーツを通して一層豊かな地域コミュニティづくりにも大きく貢献しているものである。(資料11. 2頁)

今後の課題は次の点である。創設3年目で、指導者確保、会員確保、会員募集は順調に進んでいるものの、指導員が兼務しているため、各種目ごとの運営をコーディネートする種目クラブマネージャーの増員を図らなければならない。特にSRKジュニアクラブでは種目数が多く、指導者不足になっているので養成していきたい。(資料11. 2頁)

大会参加の際の登録問題がある。SRKジュニアクラブにおいては、大会参加の際にクラブ登録か学校登録かで所属の問題が生じる。陸上では他のスポーツ少年団の活動との重複を妨げていないが、大会に出場する時は所属を決める必要がある。その際、クラブ所属にすると学校からチームが組めない等と苦情が出ることがある。クラブでは学校で出ることを勧めているが、理解を得るまでには苦労も多かった。

財政確保に関わることで、会費を値上げすることについては問題となる。これは学校体育の事情が引きずっていることだが、スポーツに対してお金を出すという意識があまりないように見受けられる。

種目の増加も検討課題である。2005年度の総会では新しい種目へ拡大していった方がよいという議論があった。特にスポーツ少年団にない種目に取り組む意向で、2006年度へ向けてアプローチして希望があれば検討していきたい。

20. 市への要望など

totoの補助を受けるのはなかなか難しいが、申請は続けていきたい。

V. 酒田市の総合型地域スポーツクラブに関する考察

ここまで酒田市に設立した5つの総合型地域スポーツクラブの設立経緯と現状について述べてきた。以下は調査結果をふまえて、酒田市の総合型地域スポーツクラブについて、その現状と成果及び課題、行政や地域社会との関わりについて考察を行う。なお序論で示した5つの視点などとあわせて議論することにする。

1. 国・県が示す総合型地域スポーツクラブの理想像との比較と現状の評価

酒田市の5つの総合型地域スポーツクラブは、国や県が示す理想像と比較して、どのような状況であるだろうか？

「総合型」とは3つの多様性(種目、世代・年齢、技術レベル)を包括していることである。総合型地域スポーツクラブについて、国は以下のような5つの特徴が挙げている。ここで、酒田市の5クラブの現状はどうであるかに注目し、比較検討することにする。

表3 国が示す総合型地域スポーツクラブの特徴と5クラブの現状

国が示す特徴	5クラブの現状
複数種目	○ 最少で4種目。他は8～11種目
多世代	△ 低年齢層と高齢者が多く、壮年層が少ないクラブが多い
クラブハウス	△ 設置されているものの必ずしも有効的な活用はされていない Eクラブにはない
指導者	○ 資格取得にも励んでいる
自主運営	△ 会費のみでは困難だが、運営は可能

①複数種目

活動種目数は4～11種目あり、国が示す複数種目という条件に当てはまる。いくつかのクラブで設立後に新たな種目が増加している。今後さらに種目を充実させるとともに、すでに太鼓を行っているBクラブのほか、他クラブでも文化活動にも取り組んでいきたいと意欲的である。

②多世代

会員数は100名前後～570名で、やや規模が小さいクラブもあるが全体として中規模クラスである。性別構成ではどのクラブも男性、女性がおり、偏っていない。年齢層・世代別構成では、単一世代、同世代のみによるクラブはない。しかし、AクラブとEクラブは小中学校の生徒が中心であり、大人の会員の多くは指導者である。また、BクラブやDクラブは年齢層が高い傾向がある。(表4)

表4 酒田市の総合型地域スポーツクラブの年齢層別会員数

	0～6歳	小学生	中学生	16～19歳	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	70歳代	合計
Aクラブ	19(4.6)	4(2.0)	136(69.4)	1(0.5)	2(1.0)	11(5.6)	13(6.6)	7(3.6)	3(1.5)	0(0.0)	196(100.0)
Bクラブ	0(0.0)	107(22.2)	41(8.5)	2(4.1)	27(5.6)	45(9.3)	55(11.4)	35(7.2)	75(15.5)	96(19.9)	483(100.0)
Cクラブ	0(0.0)	9(11.4)	7(8.9)	4(5.1)	4(5.1)	7(8.9)	17(21.5)	13(16.5)	17(21.5)	1(1.3)	79(100.0)
Eクラブ	0(0.0)	116(30.7)	262(69.3)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	378(100.0)
4クラブ計	19(1.7)	236(20.8)	446(39.3)	7(0.6)	33(2.9)	63(5.5)	85(7.5)	55(4.8)	95(8.4)	97(8.5)	1136(100.0)

(出所:山形県広域スポーツセンター資料から作成)

このように各クラブともに年齢層に偏りがある。低年齢層の会員確保および競技人口の底辺拡大は効果が現われている。しかし、特に20～30歳代をはじめとする青壮年層の会員確保が共通した課題である。

③クラブハウス

クラブハウスについて、Eクラブについては事務局はあるが、固有のクラブハウスがない。他の4クラブは各地区の中学校または小学校の体育館内に設けられている。しかし、クラブハ

ウスは設置されているが、運営拠点の中心とはなっておらず、今後活発な利用が望まれる。

④指導者

指導者は5クラブともに複数名登録されている。最も多いEクラブには42名の指導者がいる。指導者の確保の方法としては、クラブ内部からは、資格や経験を有する会員、体育指導委員、外部からは学校教員、体育協会など競技団体関係者、エアロビクス、ダンスの有資格者などである。

しかしながら、実際の指導においては一部の指導者のみに負担がかかっていることもあり、養成にも力を入れていきたいとしている。指導者には実技指導の専門性にあわせて、近年では資格も重要視されてきており、各クラブとも資格取得には前向きに取り組んでいる。

⑤自主運営

5クラブは会費を徴収し、それを主な財源として活動している。当初はtotoによる補助金が得られたので依存率も高かったが、その後の補助金の減少に直面しても活動は継続してきた。また、すべてのクラブは成文化された規約があり、組織運営も自主的・民主的に行われている。

財政面においては会費のみでの運営は困難であるが、運営は比較的安定している。その反面さらなる充実した活動のためにも、totoの助成終了後は、市独自の助成制度をつくってほしいとの要望も強い。Dクラブは会費の値上げに踏み切った。Aクラブでは賛助会員を募るなどして財政の確保に努めようとしている。

以上、国や県が示す総合型クラブの特徴と比較して、酒田市のクラブの現状にはいくつか課題もあり、国・県が示す理想的クラブの特徴を全て満たすのは容易ではない。しかし、設立後間もないことや地区の人口規模を考慮すると、総合型地域スポーツクラブとしての条件を備えていると考えられる。

個々のクラブの現状については調査結果でのべた。次にトータルにその状況を考えてみる。

5つのクラブはバラエティに富んでいる。しかし5クラブ相互の交流活動はなく、それぞれクラブごとに活動を展開している。

Eクラブを除き中学校区単位の設立のため、規模的には大規模とはいえないが、設立から3年が経過し、会員の増減を繰り返しながらも活動が継続されている。自主的に組織運営と定期的なスポーツ活動を継続しているクラブの活動は評価できるものである。

さらに活動施設を確保し、種目数の増加を図り、文化活動へも取り組んでいきたいと、今後より活発な活動にしていきたいと前向きである。

さらに、クラブ設立により以下のようなメリットが挙げられ、肯定的に評価できると考えられる。

- ①クラブ活動によるスポーツ活動機会の増加。
- ②5クラブ相互の交流はないが、各クラブ種目ごとに交流会や大会が開催されており、より広範な交流活動へとつながっている。
- ③BクラブやDクラブは高齢者層の会員が多いため、クラブの活動自体が高齢者の社会参加や生きがいづくりともなっている。
- ④AクラブやEクラブ、Bクラブは少子化時代のスポーツ少年団、部活動の指導に貢献している。

他方で課題もある。壮年層を中心に会員確保の課題はどのクラブにも共通している。また、事務局の強化、クラブハウスの活用、財政基盤の強化などの課題があり、自立した運営にはも

う少し時間を要するものと予想される。

2. クラブ設立の地域的要因と学校・地域組織との連携

①クラブ設立の基盤となる地域的要因

酒田市ではなぜ一気に5クラブができたのであろうか。たしかにクラブの立ち上げには、酒田市行政の積極的な取り組みがあった。単に他の優れたモデルを真似るのではなく、独自のクラブ創設の事業に取り組んだ。しかし、それにあわせて地域の実情に応じたクラブ設立を可能にした地域的要因があることが大きい。

酒田市の地域をみる際には、旧酒田の市外地域と昭和の合併で編入した農村地域をそれぞれ考慮する必要がある。まず、農村地域は戦前の昔からの地域コミュニティと住民生活が現在も存続している部分が多い。学校区、公民館、コミュニティ振興会、体育振興会はそこに基盤を置いている。他方で、旧酒田の市街地域においても、古くからの小学校区はまとまりをもっている。しかし、戦後の人口増加による新興住宅地の形成や酒田大火の影響により、新しいコミュニティづくりが必要になっている地区もある。その点では、1980年代以後設立されたコミュニティ振興会はその役割を担っている。しかし市外地域の学区分については複雑な要素もある。それは、人口増加などにより、小学校区と中学校区には学区の線引きにズレがあるために、中学校区の地域的まとまりの点で困難な要素をもつ点である。同じ小学校区の卒業生でも複数の異なる中学校へ進学するのである。そのため中学校区に重なる地域組織はPTAなどをのぞけば少ない。

行政は、こうした地区ごとの特性と条件を尊重したクラブづくりをすすめた。そして同時にそれぞれの地区、地域組織・団体、そして住民にはクラブ創設を可能にする条件と力量が備わっていたことを見逃してはいけな。たとえば、BクラブとCクラブは市のモデル事業として準備をすすめたが、他の3クラブはすでにクラブ創設の母体となる組織・団体の活動があったからこそ、一気に5クラブが設立できたのである。

また、人材的側面で、スポーツのみならず地域活動を推進する力量を持ったリーダー層がいること、協力する人的ネットワークが地区内に存在している点も重要である。

②学校・地域組織との関係と連携

酒田市の5クラブの設立および活動は、全て上記の地区にある学校、地域組織・団体との関係をもっている。そして、それぞれのクラブが基盤とする地域組織・団体が特徴ある性格づけをしている。しかも既存の組織・団体を壊すことなく、クラブづくりに成功したのである。

農村地域にあるBクラブは、3つの地区体育振興会を母体としてクラブづくりがなされた。スポーツに理解があり力量をもつリーダー層と住民の存在という人的要因と、昔から非常にまとまりやすいという地域性がともなって安定した活動が継続されている。現在でも地区ごとの体育振興会の活動があり、それに加えて、3地区をつなぐクラブの活動が行われている。また、スポーツ少年団や中学校の部活動との関係も深まっている。

市街地域の古い地区にあるAクラブは、学校PTAの話し合いをもとにクラブが創設された。PTA保護者や地域内外の指導者の参画と支援を得て活発に活動している。A中学校とは大変友好的な関係が築けている。学校側からの要請もあり、今後は文化活動へも意欲的に取り組んでいきたいなど、さらなる活発な活動が期待される。また中学生だけでなく、幼児やスポーツ少年団との交流も行われている。

市街地域で古く、人口の多い地区にあるDクラブは、コミュニティ振興会の活動から新たに総合型地域スポーツクラブを立ち上げた。しかし、2005年に総合型の看板を下げ、コミュニティ振興会の体育部門に位置づけられた。総合型という看板は下ろしたものの、クラブの活動はコミュニティ振興会へそのまま移行して、現在もコミュニティ振興会運営のもとで活動は継続されている。

市街地域で新興住宅街も含む地区にあるCクラブは、住民が主体となって3地区の体育振興会の協力を得ながら設立された。しかし、この地区は小学校区と中学校区のズレがあり、その結果C1学区中心となっている面がある。さらにこの地区は学校の生徒数が比較的多く、スポーツもさかんである。そのため、スポーツ少年団や中学校部活動など既存の団体とは重ならないように運営をしているため、地域組織との関係は比較的希薄である。そのため会員確保に苦勞するなどの面もある。

Eクラブは、市体育協会のジュニア部門的性格をもち、学区ではなく酒田市全域を対象にしている。会員が児童・生徒であるために、設立当初は学校側の理解を得るのに苦勞した。大会参加の際に、クラブ員として出場するのか、学校のメンバーとして出場するのかという問題があったからである。しかし、しだいに理解と協力が得られるようになった。

そして、すべてのクラブが施設利用や広報活動での便宜を受けるなど、行政や学校との良好な連携もちながら活動している。

以上のように、地域に深く根ざしている地域組織・団体は、クラブに地域性のある性格づけをしている。また、既存の地域組織・団体との連携のうえに成り立っているクラブは、住民への広報活動や指導者の確保の面等で様々な便宜が図られている。それゆえ、関係がなくなれば活動の継続が困難なクラブもあると考えられる。双方が有効に機能すればメリットは大きい。しかし、Cクラブのように地域組織、団体との線引きの面から今のところ活動種目が限られているクラブも存在する。種目数の増加や活動を広げていく際には、既存の地域組織・団体との連携や協力を得て活発にしていくことも考えられる。

体育振興会と総合型地域スポーツクラブの関係はどうなるか。体育振興会は小学校区単位に結成されており、地域に根ざしている組織である。そして市も体育振興会を地域住民の生涯スポーツを推進していく基盤として重視している。総合型地域スポーツクラブの未設立校区にも体育振興会はあるので、設立に向けては中心的役割を担うと考えられる。やはり既存の地域組織との共存、また互いに組織を有効活用した関係が望ましいと思われる。

3. 地域課題と総合型地域スポーツクラブの地域にはたす役割

ここでは総合型地域スポーツクラブの設立が地域にはたした役割について検討する。酒田市では少子高齢化が進行しており、それは市全体のみならず各地区の生活にも影響を及ぼしている。少子化は学校教育やスポーツ少年団、地域活動を困難にしている。遊びやスポーツの体験と継続的な活動ができる新しいシステムが必要となっている。また、高齢者にとっても最大の関心事である健康保持増進や運動・スポーツが日常的にできる場が必要であった。総合型地域スポーツクラブはこうしたニーズにこたえるものとして期待された。そして次のように成果をあげつつある。

①中高年齢者のスポーツ頻度の増加，健康増進，社会参加と生きがいづくり

BクラブやDクラブは比較的に中高年齢者の会員が多い。日常的に体操やウォーキング，グ

ラウンドゴルフ、卓球、ダンスなどの運動・スポーツを行うことで健康保持につとめている。またクラブの活動への参加で会員同士の交流や新しい人との出会いがある。そのため、クラブ活動への参加を通して社会参加と生きがいづくりにつながっている。

例えば、Bクラブでは、これまで一人でウォーキングしていた人がクラブに入会し、大勢で楽しく活動する充実感が口コミで広がり、ひいては会員の増加にもつながっている。そして、スポーツを行う頻度が確実に増え、B地区では統計的に見ても高齢者の体力向上が顕著である。

Dクラブでは、活動を楽しみにしている会員が多い。ダンスの活動には夫婦づれで参加する人たちも多く、楽しんでいる。スケジュール帳にクラブ活動等の予定がたくさん入っていることで、毎日の生活にメリハリが生まれ、それが生き生きとした日常生活へとつながっている。

②少子化に対応した部活動・青少年へのスポーツ普及と指導

また、少子化や学校週五日制の導入に伴うスポーツ少年団や学校部活動の受け皿としてのクラブ活動も実を結びつつある。

Aクラブ、Eクラブは小学生と中学生が主体である。Aクラブは衰退の危機に直面する中学生のスポーツ活動を地域住民でみていこうという趣旨で始まった。学校にはいない種目指導者の不足を補っている。

また、ジュニアへの普及と指導を目的とするEクラブでは、通っている学校では指導を受けられない種目を楽しむことができる。生徒数の少なさや指導者の不在から学校では成り立たない種目も、広域から集まった生徒たちと指導者によって、スポーツの場が確保されている。すでにクラブ出身者が高校野球の選手となって活躍している。Bクラブでも、すでにスポーツ少年団を取りこんで活動の幅が広がっている。そして現在は中学校の部活動とも関わりをもとうとしている。

③地域コミュニティ意識の醸成

Aクラブのように、クラブの活動以外にも地区内での交流が増え、挨拶をするようになったり、地域の小中学生を地区で育てていこうという意識も芽生えている。クラブの指導者が中学生の進路相談に乗ったりすることもあった。地区の清掃活動も行っている。また、B中学校区でもクラブ活動を通して3地区間の交流が活発化しているという。Cクラブでは家族で参加する会員もあり、スポーツを通して家族や地区のコミュニケーションが活発に行われている。Dクラブではコミュニティ振興会の学習文化活動の幅を広げ、コミュニティ活動の一環として重要な役割を担っている。このように、クラブの活動はよりよい地域コミュニティ醸成の場となっている。

このように、設立から短期間ではあるが、総合型地域スポーツクラブの設立とその活動は、それぞれの地域において一定の効果をもたらしつつあると考えられる。

4. 酒田市のスポーツ行政とクラブ設立以降の課題

ここでは、クラブ設立と酒田市スポーツ振興計画、市の行政との関わりで検討する。

国がスポーツ振興基本計画を策定して総合型地域スポーツクラブ創設を打ち出したのは2000年9月である。酒田市で5つの総合型地域スポーツクラブが設立したのは2002年度であり、比較的早い時期に地方都市に5クラブができたことは高く評価できる。

スポーツ振興基本計画では、2010年度までに各市区町村に少なくとも1つはクラブを育成し、将来的には中学校区単位に設立することを挙げている。酒田市はEクラブを除き4つは中学校

区を基盤としているので合致しており、設立数からみると進んでいると考えられる。

このように、酒田市スポーツ振興計画に基づき、市の呼びかけに応じて5クラブの創設につながったことは評価できる。酒田市ではスポーツの振興に貢献する積極的なクラブづくりを推進したといえる。

また、5クラブ設立以降、行政として今後解決すべき課題もいくつか見えてきた。

- ① toto や補助金がなくなった後の財政の問題
- ② 活動する体育・スポーツ施設の不足の問題
- ③ 設立済みのクラブのサポート、連携・交流の問題
- ④ 今後の新クラブの創設

2002年のクラブ設立時から得られた toto の補助金がなくなり、自主財源で運営しなければならない。市では補助金は出していないものの、学校開放や施設使用料金等の便宜をはかっている。クラブでは現在の状況でも活動は維持できるが、補助金制度の要望はある。活動施設は農村地域に比較して、市街地域で不足している。その結果、クラブが種目や活動の幅を広げるのに困難を感じている。また、設立済みのクラブも交流や協同の機会は今のところみられない。年に1回5クラブの将来的には競技別団体のような大会・競技会の開催も視野に入れていく必要があると考える。

酒田市には現在8中学校区がある。しかし半数の未設立4中学校区では課題を抱えていたり、合意を得ることができずクラブ設立には至っていない。2005年度の市町村合併や、今後進むであろう学校統廃合による学校区の再編問題も新たに浮上してきた。

また、クラブ未設立校区の総合型地域スポーツクラブの認知度が予想していたより低いと感じられる場面もあった。クラブ会員の増強を図るためにも、広範な地域住民へのクラブ広報活動を行政側も重点的に行うことが必要であると考えられる。

行政では中学校区設立の方針は維持しているが、2006年度～2007年度にかけて酒田市スポーツ振興計画は改定予定であり、上記の状況をふまえて検討する必要があると考える。

5. 中学校区単位のクラブ設立の適否と今後の可能性

① 中学校区単位設立の長所と短所

Eクラブをのぞき、4クラブは中学校区単位に設立されている。ある程度限られた範囲であるものの、それぞれ地域の特性や会員のニーズを反映した活動が続けられている。

比較的運営が順調であると思われるBクラブ等、活発な活動が続けられていることは評価できると考えられる。

地域組織の活動とは重ならないようにという方針で設立したCクラブは軽スポーツ中心という特徴がある。しかし、中学校区という限られた範囲内で既存の地域組織・団体とは一線を画した形の中では、多くの会員を確保することは困難であると思われる。

小学校区は体育振興会、コミュニティ振興会、学校などの地域組織のまとまった単位となっている。しかし小学校区だけでクラブを設立するのは、人口的にも少なくスポーツ愛好者も限られる。また体育振興会との違いもない。そこで中学校区が注目されることになる。適度な身近さであるエリアの広さ、住民数、小学校区との重なりと地域組織との関係など、メリットが少なくない。

そして施設利用面でも中学校区単位の設立には意味があると考えられる。学校開放の制度を

利用して使用料や使用日時の便宜も図ってもらうことができる。例えば、中学校区単位ではなく、対象地域が広いほど施設利用の競合や使用料の負担増なども考えられる。

またクラブの活動が定期的に組まれていることで、学校施設の有効活用にもつながっている。この点からして既存の4クラブは中学校区を基盤とすることで施設利用面の魅力やメリットも大きいと考えられる。

しかし、農村地域は小学校区のまとまりが中学校区であるケースが多いが、市街地域では小学校区のまとまりが中学校区とはなっていない。このあたりの事情が、Cクラブでは困難な点の一つにあげられていた。

②柔軟なクラブづくりの可能性

文部科学省では中学校区を目安に総合型地域スポーツクラブを設立と掲げている。酒田市でも中学校区設立の方針は堅持されている。しかし2005年度の市町村合併、さらに今後進むと予想される学校統廃合の問題などから、必ずしも中学校区という単位にこだわらず、地域住民のニーズ、地域の特性を活かした柔軟なクラブ設立が考えられると思う。

酒田市は小学校区がそのまま中学校区とはならない。その線引きによる摩擦も考慮し、住民の要望によるクラブ設立のためには校区に関わらず、どの地域からの参加も可能というような広域を対象としたクラブも考えられる。中学校区というやや狭い地域では会員も限られ、その結果会員数の伸び悩みからクラブの継続が困難になることも予想されるからである。

また大きい受け皿をつくる意味でも2中学校区から1つのクラブを立ち上げることで、小規模クラブを連合化していくことも可能であると思う。

それは20～30代を含む青壮年期のニーズに応えるクラブづくりにも重要な視点である。それは次の理由からである。既設の中学校区を基盤とする4クラブは、スポーツ少年団・学校部活動などの青少年層と健康増進、生涯スポーツなどの高齢者層の2つの年齢層を核にした活動をしていた。青少年を学校地域で育成することや高齢者が身近な施設でスポーツを楽しむという点では、中学校区で適切であろう。しかし、若い世代や壮年期の人たちは、競技スポーツ種目やフィットネス系の運動への関心も高い。こうした競技種目や運動機器を必要とする活動は、より広域な地域から興味・関心に応じて会員を確保するのがよいと考えられるからである。

③今後の課題

今後のクラブ設立にあたっては、2005年10月の市町村合併により酒田市となったX中学校区、Y中学校区、Z中学校区には体育協会主導のクラブを設立準備中である。また、学校区規模の最も大きいS中学校区には体育課の方から要請はしているものの、クラブ立ち上げに熱心な人材の不足など実現にはいくつかの課題が残る。

今後進むであろう学校統廃合の問題からしても、これまでの形態とは異なるクラブ作りも魅力的である。既存の地域組織との関係が全くないクラブなどである。設立に向けては、熱心な有志の協力が必要であると予想され、若年層に魅力であるかどうかとも重要になってくると思われる。酒田市では中学校区を重要視しているが、必然的に既存の地域組織との関係が発生し、共存を目指せばスポーツの独自性はなくなってしまう。制約がでることで、新しい活動の魅力が縮小してしまうのではないだろうか。

クラブの基盤にこだわることなく地域住民が身近なところでスポーツができる環境を整えることで、より活動の輪が広がっていくような活動形態を築くことが最も重要であると思う。

VI. まとめ

本研究では酒田市における総合型地域スポーツクラブの設立の経緯と現状についてあきらかにした。そして調査の結果、次のことが明らかになった。

酒田市では、国や山形県の動向から影響をうけながらも、市のスポーツ計画に総合型地域スポーツクラブを位置づけ、2000年から独自のクラブ創設に取り組んだ。行政の働きかけによって比較的早い時期に一気に5つのクラブができた。中学校区単位に、2クラブはモデル事業として、2クラブは市の呼びかけに応じて参加した。他の1クラブは酒田市全域を対象に体育協会より立ち上げられた。クラブ創設には、PTA、地区体育振興会、コミュニティ振興会、市体育協会など既存の地域組織・団体との関係が深く、これがクラブの性格にも影響を与えている。こうした既存の組織団体を壊すことなく新たなクラブづくりをした。

各クラブでは理念と目的を掲げた規約をもち、地区の施設を中心に定期的・継続的な組織運営とスポーツ活動を展開している。地区の人口構成を反映し、児童生徒や中高年齢者を主体とし、活動も軽スポーツや競技スポーツの基礎が中心である。クラブが設立してまだ歴史が浅いが、活動は徐々に広がりつつある。

5クラブ相互の交流はないものの、各クラブごとに充実した活動が続けられており評価できる。そして、クラブができたことで、文化・スポーツの普及やコミュニティ形成などの地域課題の解決に貢献している。中学校区単位の設立は8学区中4団体で半数という点から達成率もおおむね高い。

クラブの課題としては、会員と財政の確保で運営を安定させていくことが重要である。また、活動施設の不足の問題なども共通している。組織運営体制ではクラブ代表者や指導者等、比較的少数の人に負担がかかっていることである。今後は事務局体制を強化していくとともに、指導者の養成・強化を図ることも大切である。

行政としては、住民の生涯スポーツを推進していくために、クラブの未設立地区への創設、財政、施設整備などクラブ活動のサポート支援策が課題である。こうした課題を取り込んだ市町村合併後の新スポーツ計画の作成が期待される。

今後の課題は、クラブのこれからを見守っていくとともに、クラブ会員の活動に対する意識やクラブに対する評価、要望の聞き取り調査を行いクラブと会員の相互関係をみることである。2005年10月に市町村合併により周辺の町村が編入した。また近年問題になっている学校統廃合の問題もある。こうした動向とそれがもたらす影響等についてみていく必要がある。

(付記) 本研究の一部は第53回日本社会教育学会研究大会(2006年9月)で発表した。分担：I～IV-1, V, VI鈴木・笹瀬, IV-2～6鈴木。

謝辞

ご多忙の中をこころよく調査にご協力いただきました、酒田市教育委員会体育課、山形県広域スポーツセンター、そして酒田市の5クラブの皆様がたに心からお礼申し上げます。

Ⅶ. 資料・文献

1. 酒田市体育課『酒田の教育（体育行政）』酒田市教育委員会体育課，2004年。
2. 酒田市『酒田市スポーツ振興計画—スポーツで健康，活力，夢21 ひとり‘1’スポーツをめざして』酒田市，2003年1月。
3. 酒田市体育振興会『30年—健康と生涯スポーツ』酒田市体育振興会，2003年11月22日。
4. 酒田市教育委員会『酒田の教育』酒田市教育委員会，2003年10月。
5. 酒田市教育委員会体育課『みんなでスポーツ!!—スポーツ施設 Sakata』酒田市教育委員会体育課。
6. 山形県広域スポーツセンター『地域みんなで作り上げていくスポーツクラブへ：総合型地域スポーツクラブ』山形県広域スポーツセンター，2004年。
7. 財団法人山形県体育協会・山形県教育委員会・山形県広域スポーツセンター『みんなでつくろう！いつでもどこでもいつまでも 総合型地域スポーツクラブ』財団法人山形県体育協会，2005年2月。
8. 山形県教育委員会『21世紀はあなたが主役 新しいスポーツシーン 総合型地域スポーツクラブ』山形県教育庁スポーツ保健課，2002年。
9. 鳥海ふれあいスポーツクラブ『第1号議案 鳥海ふれあいスポーツクラブ規約（案）』鳥海ふれあいスポーツクラブ，2002年。
10. 酒田市スポーツクラブ『酒田市スポーツクラブ規約』酒田市スポーツクラブ，2002年12月26日施行。
11. 酒田市スポーツクラブ『総合型地域スポーツクラブ・酒田市スポーツクラブ平成17年度通常総会』酒田市スポーツクラブ，2005年8月18日。
12. 酒田市スポーツクラブ『SRKジュニアクラブ募集要項』SRKジュニアクラブ，2004年。
13. 東禅寺スポーツクラブ『健康さかた21 東禅寺スポーツクラブ設立総会』東禅寺スポーツクラブ，2003年3月15日。
14. 東禅寺スポーツクラブ『東禅寺スポーツクラブ平成17年度会員募集』東禅寺スポーツクラブ，2005年。
15. 酒田市東禅寺コミュニティ振興会『平成17年度酒田市東禅寺コミュニティ振興会定期評議員会議案書』酒田市東禅寺コミュニティ振興会，2005年4月9日。
16. 酒田市東禅寺コミュニティ振興会『酒田市東禅寺コミュニティ防災センター建設20周年記念特集号 コミュニティとうぜんじ』酒田市東禅寺コミュニティ振興会，2005年10月1日。
17. 六華スポーツクラブ『平成17年度六中地区六華スポーツクラブ総会』六華スポーツクラブ，2005年4月25日。
18. 六華スポーツクラブ『心と体をリフレッシュ！—六華スポーツクラブ会員募集』六華（ろっか）スポーツクラブ会長 前田稔，2005年3月。
19. 六華スポーツクラブ 事務局長 山口羊一『総合型地域スポーツクラブの活動状況と今後の活動』六華スポーツクラブ 事務局長 山口羊一，2005年9月30日。
20. 希望ヶ丘体育文化振興会『総合型地域スポーツクラブ・希望ヶ丘体育文化振興会会員募集』希望ヶ丘体育文化振興会。
21. 希望ヶ丘体育文化振興会 会長 岩浪豊『県PTA連合会パネラー原稿』希望ヶ丘体育文化振興会会長 岩浪豊，2004年10月。
22. 希望ヶ丘体育文化振興会『補助金交付要望理由書』希望ヶ丘体育文化振興会，2005年。
23. 希望ヶ丘体育文化振興会『希望ヶ丘体育文化振興会資料』希望ヶ丘体育文化振興会，2005年。
24. 文部科学省『「総合型地域スポーツクラブ」育成マニュアル—クラブづくりの4つのドア』アドスリー，2002年3月10日。
25. 山形県教育委員会『平成17年度総合型地域スポーツクラブ育成拡大会議資料』山形県教育委員会，2005年9月29日。
26. 文部科学省スポーツ・青少年局生涯スポーツ課『平成16年度総合型地域スポーツクラブに関する実態調査結果概要』文部科学省スポーツ・青少年局生涯スポーツ課，2005年3月。
27. 賑わい・安らぎ・輝き 山形県酒田市公式サイト
http://www.city.sakata.yamagata.jp/contents/top_index.asp
28. 山形県教育委員会『山形県スポーツ振興計画～豊かなスポーツ文化の創造～ [スポーツのある生活の実現]を目指して』山形県教育庁スポーツ保健課，2002年3月。

29. 鳥海ふれあいスポーツクラブ『平成17年度鳥海ふれあいスポーツクラブ総会資料』鳥海ふれあいスポーツクラブ, 2005年7月。
30. 鳥海ふれあいスポーツクラブ『総合型地域スポーツクラブ補助金関係要望書』鳥海ふれあいスポーツクラブ, 2004年7月。
31. 酒田市『Sakata Data File 2004年 酒田市勢要覧資料編』酒田市, 2004年。
32. 酒田市『酒田市総合計画(基本計画)後期計画』酒田市, 2001年3月。
33. 財団法人日本スポーツクラブ協会(編)『総合型地域スポーツクラブマネージャー養成講習会テキスト』文部科学省, 2001年。
34. 財団法人日本スポーツクラブ協会(編)『スポーツクラブ白書2000—生涯スポーツ社会の実現に向けて』厚有出版, 2001年。
35. 日本体育・スポーツ経営学会(編)『テキスト総合型地域スポーツクラブ』大修館書店, 2002年。
36. NPO法人クラブネット(監修)・黒須充・水上博司(編)『ジグソーパズルで考える総合型地域スポーツクラブ』大修館書店, 2002年。